

# 研 究 紀 要

第 12 号

1 9 9 5

財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

卷頭写真 埼玉県内出土象嵌遺物の研究（瀧瀬・野中）



1. 広木大町9号墳出土 鐔



2. 広木大町20号墳出土 鐔・鍔



3. 広木大町 2号墳出土 鐸



4. 広木大町 5号墳出土 鞘尻



5. 永明寺古墳出土 鐸・鍼

# 目 次

## 序

方形周溝墓と溝

—方形周溝墓に伴う溝について—

福田 聖 ..... 1

古墳時代集落祭祀の一考察

平岩 俊哉 ..... 17

埼玉県内出土象嵌遺物の研究

—埼玉県の象嵌装太刀—

瀧瀬 芳之・野中 仁 ..... 37

北武藏の古墳時代馬飼養地域

山川 守男 ..... 95

中世地鎮の一様相

—大里郡寄居町末野遺跡例を中心として—

鈴木 孝之 ..... 113

# 埼玉県内出土象嵌遺物の研究

## —埼玉県の象嵌装大刀—

瀧瀬 芳之・野中 仁

**要旨** 象嵌遺物は、保存処理作業の段階で発見されることが多く、そのほとんどは鉄刀に付属する刀装具に施されている。今回の調査によって9例の象嵌遺物（象嵌装大刀および刀装具）を新たに発見することができた。その結果、現在確認されている象嵌装大刀は、17遺跡18例となった。これらの型式学的分析や象嵌文様の考察から、埼玉県における象嵌装大刀は、6世紀第3四半期に出現し、6世紀末から7世紀初頭にかけて最も頻繁に副葬されたものと考えられる。その背景には畿内政権の東国における政治的基盤の強化が想定されるが、広木大町古墳群にみるような、一古墳群のなかでの複数の副葬から、象嵌装大刀のあるものは、金銅装などの他の飾り大刀とは異なる性格を有していた可能性が指摘できる。

象嵌遺物の保存処理及び象嵌の表出は、今回新たに確認した資料を含む合計8例の鉄刀について実施した。出土後すでに十数年を経過している資料もあり、保存状態は良くないものが多く、錆瘤等による象嵌の浮き上がりが多いことが全体の特徴である。また、表出作業に並行して象嵌細部の観察を行い、技法的な知見を得た。

### I はじめに

遺跡から出土する鉄製品の中には、象嵌が施されているものが存在する。それはよほどの好条件に恵まれない限り、X線写真を撮影することによってはじめて明らかとなる場合が多い。近年、保存処理の必要性から、出土鉄製品にX線透過調査を実施する機会が増えている。それにつれて、象嵌遺物の発見件数も増加の一途をたどり、現在、管轄の限りでさえ、全国で320例以上の存在が確認されている（1996年4月現在）。そして、その象嵌のほとんどが鉄刀に付属する刀装具に施されているのである。

象嵌装大刀に関する研究は、こうした資料の蓄積と無縁ではない。西山要一氏は、これらの遺物をはじめて集成し、編年表を示された（西山 1986）。その他にも、亀甲繋鳳凰文の施された象嵌装大刀を中心に、編年を主体として考察された橋本博文氏（橋本 1985、1986、1993）、亀甲繋文の起源を考察された網干善教氏（網干 1986）、九州の資料を紹介し、分析を加えられた横田義章氏（横田 1982、1993）、錆周縁の文様の分類を示された田中新史氏（田中 1988）などの功績をあげることができる。これらはおもに文様からの取り組みが主流であるが、町田 章氏はいわゆる儀仗大刀と称する大刀全体の中で、象嵌装大刀の位置づけをされている（町田 1987）。韓国においても、李午臺・金邱軍両氏によって、象嵌遺物の集成研究が行われている（李・金 1992）。

この小論では、埼玉県内の既知の象嵌装大刀と、今回新たに確認された象嵌遺物を紹介し、それ

らの資料を中心として、象嵌装大刀の考古学的考察を行う。さらに、象嵌の構造や技法を分析したうえで、保存処理の観点から論考を加えることとする。

## II 県内の資料と出土古墳の概要

埼玉県内において、跡もしくは刀身に象嵌が施された鉄刀は、武装のみの出土例を含め、19点が18の古墳から出土している。これらの象嵌の材質は、判明しているものすべて銀である。以下、その遺物および出土古墳の内容を概観する。なお、資料についた番号は、今後の記述においても共通する。記載の方法は次のとおりである。

【資料No】挿図番号 写真番号 ①古墳名 ②所在 ③遺物の種類（象嵌部位） ④象嵌の文様  
⑤所蔵 ⑥文献 ⑦挿図出典 ⑧古墳の概要

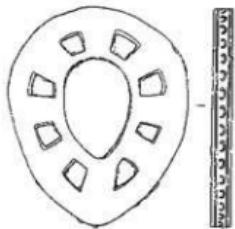
【1】第1図1 ①山王塚（さんのうづか）古墳 ②大宮市水判土字山王塚 ③八窓鐸 ④耳（周縁部）に2条の直線にはさまれた連続するC字状文が施される。平（表裏面）にはない。象嵌未表出。⑤東京国立博物館 ⑥大宮市 1968 東京国立博物館編 1986 ⑦東京国立博物館編 1986 の計測値および写真をもとに作図。⑧鴨川右岸に形成された植木古墳群に属する円墳である。規模は不明。江戸後期に発掘され鉄刀などが出土したと伝えられ、大正年間に東京国立博物館が受理した「北足立郡植木村大字水判土字山王塚474」出土の資料がそれにあたると考えられる。この他に男子埴輪の頭部が出土している。主体部の横穴式石室は、鴨川流域の古墳に通常使用されている凝灰岩とは異なり、秩父産の緑泥片岩で構築されている。

【2】①つかのこし古墳 ②岩槻市大字馬込字一番 ③無窓鐸・鍔 ④鍔および鍔には直線とC字状文を主体とした文様が施されている（註1）。⑤岩槻市教育委員会（満蔵寺旧蔵品）⑥岩槻市役所 1983 ⑧練瀬川左岸の台地上に立地する。周辺に数基の古墳が存在しており、古墳群を形成していたものと思われる。遺物は大正末年頃に発掘されたものであり、鉄刀・鉄鎌・耳環・須恵器が出土している。遺構に関しては明らかでない。

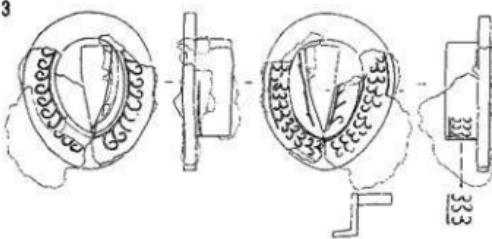
【3】第1図3 ①附川（つきがわ）7号墳 ②東松山市石橋字附川 ③鉄刀（無窓鐸・鍔） ④鐸の柄側（表）に1列の蕨手状のC字状文が、鞘側（裏）には2列の双葉状になったC字状文が線で区画された間に施されている。ともに左右対象となる。耳に象嵌は施されていないようである。鍔の側面には鍔裏と、塞ぎには鍔表と同様のC字状文が配されている。⑤東松山市教育委員会（埼玉県立歴史資料館保管）⑥金井塚 1971 岩本 1981 ⑦練瀬実測。⑧附川古墳群は都幾川左岸の自然堤防上に立地し、十数基の円墳で構成されている。7号墳は最も規模の大きい径27mの円墳で、主体部は胸張りを有する複室構造の横穴式石室である。出土遺物は鉄刀・刀子・鉄鎌・弓金具・耳環・玉類・紡錘車・須恵器がある。

【4】第1図4 ①久米田（くめだ）古墳群 ②比企郡吉見町大字久米田 ③鉄刀（六窓鐸・刀身）

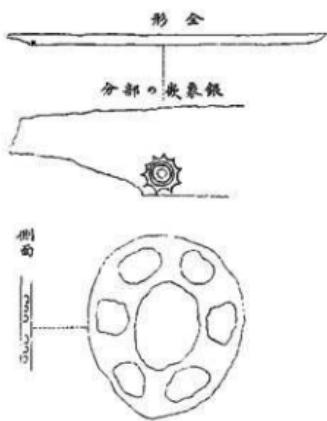
1



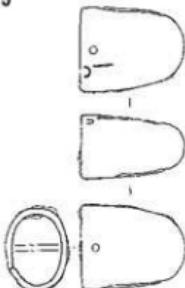
3



4

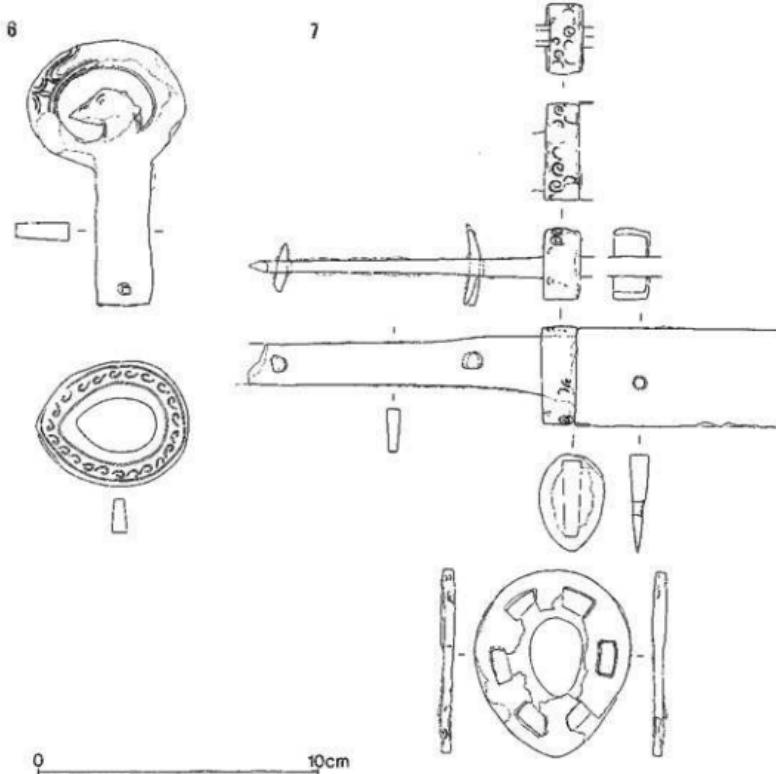


5



0 10cm

1. 大宮市 山王塚古墳 3. 東松山市 附川7号墳 4. 吉見町 久米田古墳群 5. 滑川町 大道古墳  
第1図 象嵌遺物(1) ( $S = 1/2$  4のみ縮尺不同)



6. 告野町 稲荷塚古墳 7. 告野町 金崎古墳群

第2図 象嵌遺物(2) (S=1/2)

④鐸の耳に2条の直線にはさまれたC字状文が、鍔元孔の周囲には花文が施される。 ⑤不明 ⑥若林 1899 河野 1935 ⑦若林 1899より転載。 ⑧久米田古墳群は丘陵上に立地する古墳群で、径28mのかぶと塚古墳を中心とし、数基の円墳で構成されていた。この鉄刀は1859年（安政6）に一円墳から出土したもので、1860年（万延元）に栗原信充の『柳庵隨筆餘編』によって初めて紹介された。翌1861年（文久2）に内田信好によって著された『古墳都々伊考』には、発掘時の状況と出土遺物の全容が記録されている。それによると、主体部は縞泥片岩を用いた組合式の箱式石棺と推定される。遺物には鉄刀と替があり、象嵌は肉眼で観察できるほど明瞭であったと考えられる。

【5】第1図5 写真6・7 ①大道(だいどう)古墳 ②比企郡滑川町大字羽尾 ③精尻もしくは円頭柄頭 ④象嵌は大半が失われているが、縁に半円文が残る。その上にやや長い線がみられ、羽状文であった可能性もある。 ⑤滑川町教育委員会 ⑥木村 他 1986 ⑦瀧瀬実測。象嵌はX線写真から作図。 ⑧滑川と市の川にはさまれた丘陵上に位置する。岩屋塚古墳群中の1基であるが、古墳群の内容は不明な点が多い。径17mの円墳と考えられ、主体部は凝灰岩を使用した胴張りをもつ横穴式石室である。大半が破壊されており、遺物も散乱した状態で出土した。鉄鎌・耳環・玉韁が共存している。

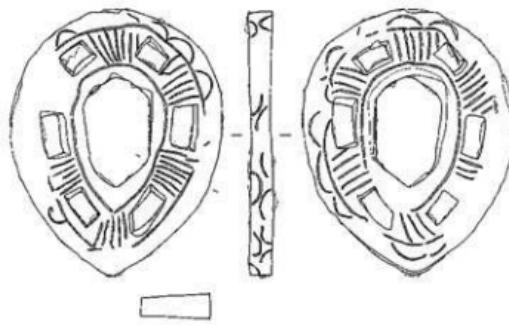
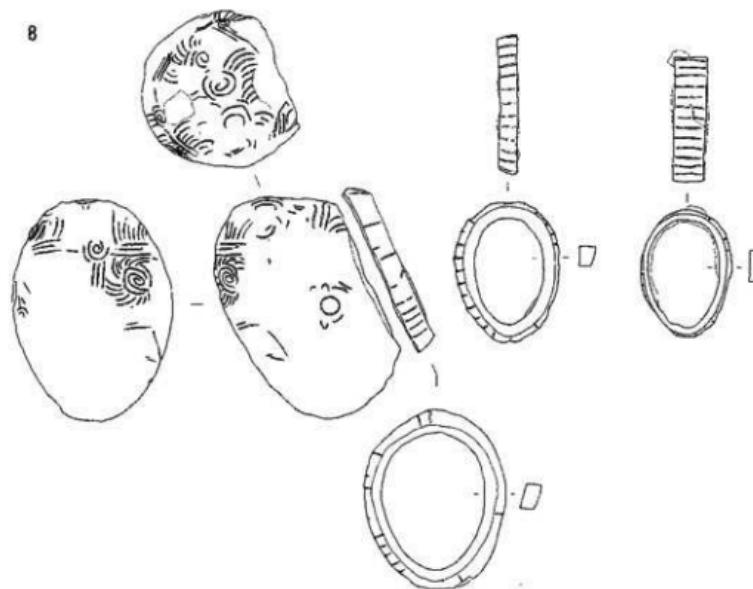
【6】第2・8図6 ①稻荷塚(いなりづか)古墳 ②秩父郡皆野町大字国神字上の平 ③単鳳環頭大刀(柄頭・無窓鍔・鍔) ④環体には曲線を多用した象嵌が施されるが、文様意匠は不明である。環内は単鳳には目と輪郭を縁取った象嵌を施す。鍔には連続渦文状の文様が、鍔の耳にはC字状文、両面平には線区画内を連続するC字状文が象嵌される。環体の象嵌は肉眼で観察できるが、他は未表出。 ⑤東京国立博物館 ⑥東京国立博物館編 1986 皆野町 1988 ⑦神林淳雄氏資料(國學院大学蔵)をもとに、東京国立博物館編 1986の写真を参考に作図。 ⑧荒川左岸の河岸段丘上に位置する円墳である。規模や主体部などの詳細は不明。遺物は環頭大刀のほかに鉄刀・刀子・須恵器(瓶)が出土している。

【7】第2・8図7 写真8~11 ①金崎(かなきき)古墳群 ②秩父郡皆野町大字金崎 ③鉄刀(六窓鍔・鍔) ④鍔の耳には二重の半円文、鍔には連続渦文が施される。 ⑤皆野町教育委員会 ⑥皆野町 1988 ⑦瀧瀬実測。 ⑧金崎古墳群は荒川左岸の河岸段丘上に形成された古墳群である。現存するのは大塚1~3号墳と天神塚古墳の4基であるが、かつては8基以上の円墳があったといわれている。これらの古墳はいずれも径数十mで、うち大塚1号墳を除く3基は横穴式石室を主体部としている。古墳を確定できないが、象嵌装大刀を含め5振りの鉄刀が金崎古墳群出土遺物として伝わっている。

【8】第3・8図8 ①塚本山(つかもとやま)137号墳(県報告19号墳) ②児玉郡美里町大字下児玉字西村 ③頭椎大刀(柄頭・柄頭縁金具・縁金具・六窓鍔・鍔) ④柄頭は亀甲繋文内に渦文とそれを中心とした旋文を施す。繋ぎも渦文である。鍔目の周囲には花文をあしらう。両縁金具と鍔は直線の連続である。鍔は耳に交差の半円文が施され、平は半円文の縁取り以外は直線を多用して充填している。 ⑤埼玉県立歴史資料館 ⑥増田 他 1977 岩本 1986 ⑦瀧瀬実測。 ⑧塚本山古墳群は小山川左岸の丘陵上に立地し、170基以上の古墳で形成されている。円墳がほとんどを占め、前方後円墳は確認されていない。137号墳は径11mの円墳である。主体部は胴張りを有する河原石を使用した横穴式石室で、奥壁も側壁同様に模様積みである。共伴遺物には鉄刀・鉄鎌・耳環・須恵器・土師器がある。

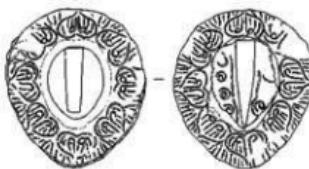
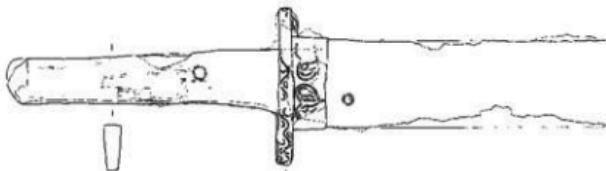
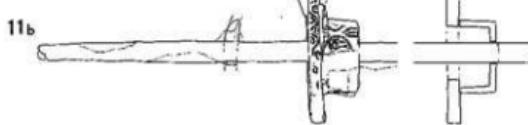
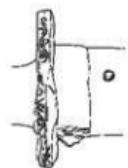
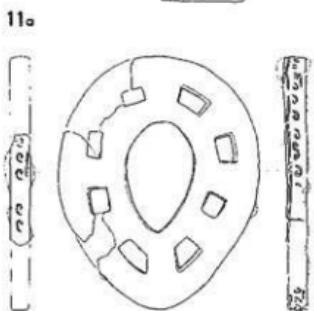
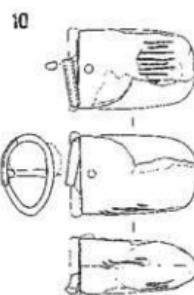
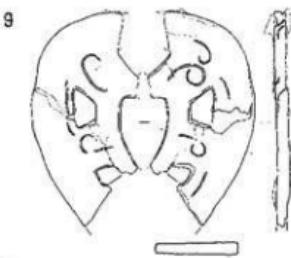
【9】第4図9 卷頭写真3・写真12・13 ①広木大町(ひろきおおまち)2号墳 ②児玉郡美里

8



0 10cm

8. 美里町 塚本山137号墳  
第3図 象嵌遺物(3) ( $S = 1/2$ )



0 10cm

9. 美里町 広木大町 2号墳 10. 美里町 広木大町 5号墳 11a b. 美里町 広木大町 9号墳  
第4図 象嵌遺物(4) ( $S = 1/2$ )

町大字広木 ③六窓鐸 ④おおざっぱなC字状文が透の間に配され、透の外側を縁取るように線が施されている。耳の象嵌は大半が欠落しているが、半円が交互に連續するものと考えられる。⑤美里町遺跡の森館 ⑥菅谷・笛森 1975 ⑦瀧瀬実測。⑧広木大町古墳群は身駒川中流域右岸の自然堤防上に立地し、帆立貝式を含む4基の前方後円墳と80基の円墳で形成されている。2号墳の墳丘から4振りの鉄刀と鉄鎌などの鉄器がまとめて出土した。これらの遺物は、周囲の古墳から出土した遺物を後にまとめて埋め戻したものと伝えられている。

【10】第4・8図10 卷頭写真4・写真14・15 ①広木大町5号墳 ②児玉郡美里町大字広木 ③鞘尻 ④金銅製の縁金具をもつ。連続する線の象嵌が見られるが、残りが悪く、全体の文様構成は不明である。⑤美里町遺跡の森館 ⑥菅谷・笛森 1975 ⑦瀧瀬実測。⑧5号墳は径20~30mの円墳で、緩やかな胸張りをもつ横穴式石室を主体部としている。石室は奥底も側壁同様に模様積みである。石室内から金銅装主頭大刀・鉄刀・刀子・鉄鎌・須恵器が出土している。

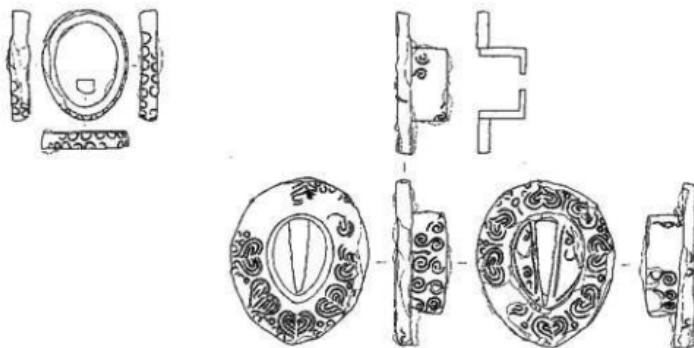
【11a】第4・8図11a 写真16・17 ①広木大町9号墳 ②児玉郡美里町大字広木 ③鉄刀（八窓鐸） ④鐸の耳には直線で区画された間にC字状文が施される。S字状になる部分もある。鐸の平には象嵌はない。⑤美里町遺跡の森館 ⑥菅谷・笛森 1975 美里町 1986 ⑦瀧瀬実測。⑧9号墳は全長32mの前方後円墳で、主体部は短冊型の袖無型横穴式石室である。墳丘からは埴輪列が検出された。出土遺物には鉄刀・刀子・鉄鎌・玉類・須恵器・埴輪がある。

【11b】第4・9図11b 卷頭写真1・写真18~23 ①広木大町9号墳 ②児玉郡美里町大字広木 ③鉄刀（無窓鐸・鍔） ④鐸の平には旋文充墳のハート形文が8単位配され、その隙間は旋文で埋められる。耳には波状文とC字状文が組み合わさる。鍔の側面には鐸と同じハート形文が6単位、塞ぎにはC字状文が施される。⑤~⑧aと同じ。

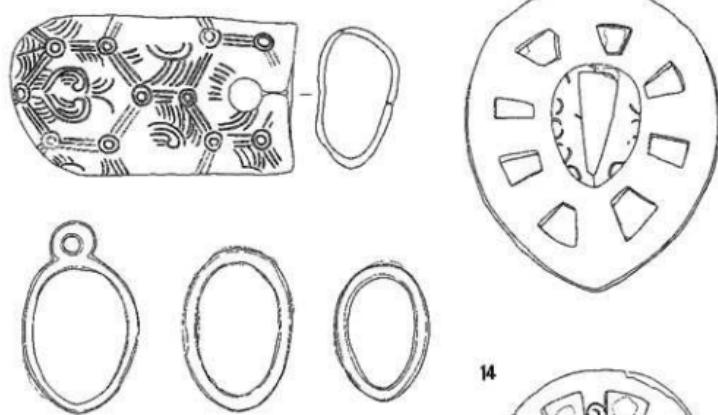
【12】第5・9図12 卷頭写真2・写真24~31 ①広木大町20号墳 ②児玉郡美里町大字広木 ③鉄刀（縁金具・無窓鐸・鍔） ④縁金具には2列の対向する半円文が施される。鐸の平には8単位の重ハート形文が配され、隙間は円・半円・線で充墳される。表のハート形文のうち1単位のみモチーフが異なる。耳は欠落が著しいが、部分的にC字状文が認められる。鍔の側面には渦文が対になったS字状文が、塞ぎにはC字状文が施される。⑤美里町遺跡の森館 ⑥菅谷・笛森 1975 ⑦瀧瀬実測。⑧20号墳は径20m前後の円墳で、5号墳と同様の胸張りをもつ横穴式石室を主体部としている。出土遺物には鉄刀・鉄鎌・刀金具・耳環・埴輪がある。

【13】第5図13 ①秋山（あきやま）古墳群 ②児玉郡児玉町大字秋山 ③円頭大刀（柄頭・八窓鐸・鍔） ④柄頭は亀甲繋文内に火炎状文と旋文を充墳する。繋ぎは二重円文である。鐸の象嵌はよくわからない。鍔は塞ぎに半円文を施しているが、側面部分は明らかでない。⑤不明 ⑥埼玉県 1951 ⑦神林涼雄氏資料および埼玉県 1951の写真から作図。⑧大字秋山から鉄鎌とともに

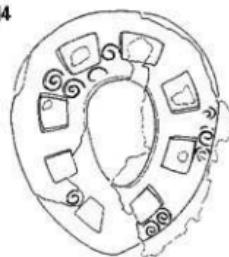
12



13



14



0 10cm

12. 美里町 広木大町20号墳 13. 児玉町 秋山古墳群 14. 熊谷市 小曾根神社古墳

第5図 雜器遺物(5) ( $S = 1/2$ )

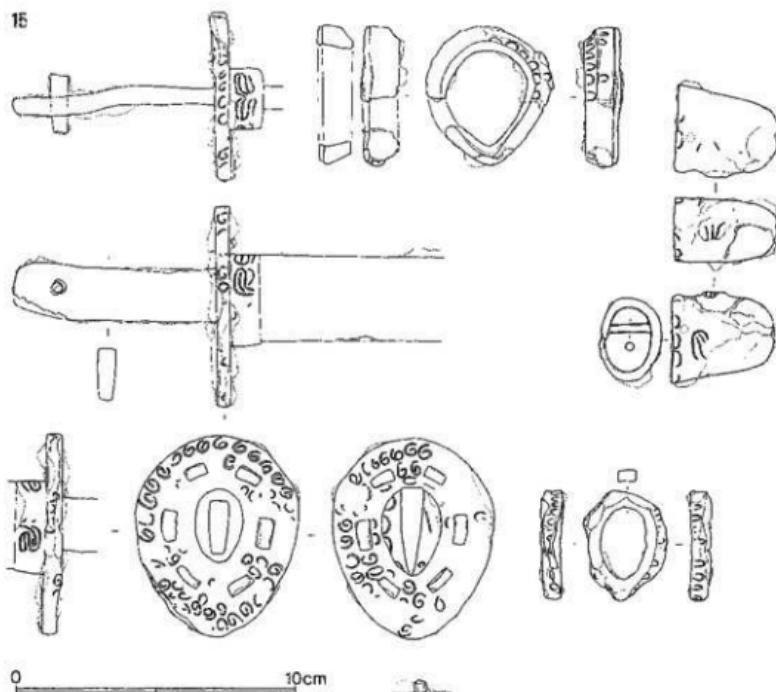
出土した遺物である。古墳の詳細は不明。秋山古墳群は小山川右岸に位置し、全長60mの前方後円墳である諏訪山古墳や、径34mの円墳で二重の周溝をもつ庚申塚古墳を中心とした40基以上の古墳で形成されている。

【14】第5図14 ①小曾根神社（おぞねじんじゃ）古墳 ②熊谷市小曾根 ③八窓鐸 ④平に渦文を充填する。耳にもあるが文様不明。象嵌未表出。 ⑤東京国立博物館 ⑥熊谷市 1963 東京国立博物館編 1986 ⑦東京国立博物館編 1986の計測値および写真をもとに作図。 ⑧銀装大刀・鉄刀・耳環・玉類・飾金具とともに、1913年（大正2）「小曾根神社付属地」から発見された資料である。小曾根神社の境内には径25mの円墳（小曾根神社古墳）があり、鉄刀や鉄鎌、耳環の出土が伝えられている。東京国立博物館の遺物はおそらくこの古墳から出土したものと推定される。小曾根神社古墳は利根川右岸の自然堤防上に立地する中条古墳群の西端に位置している。中条古墳群は全長40mを越える前方後円墳である鉢塚古墳や女塚1号墳を中心に、広範囲に形成された大規模な古墳群である。

【15】第6・9図15 写真32～41 ①三ヶ尻林（みかじりばやし）4号墳 ②熊谷市大字三ヶ尻字林 ③頭椎大刀（柄頭縁金具・縁金具・六窓鐸・鍔・鞘尻） ④両縁金具の耳には半円文が、鍔には耳・平ともに「の」の字状の渦文が充填される。鍔の側面には植物文が施され、塞ぎには半円文が巡る。鞘尻は鍔と同様の文様があるものと考えられ、縁には連続する半円文が施される。 ⑤埼玉県立埋蔵文化財センター ⑥小久保 他 1983 ⑦瀧瀬実測。 ⑧三ヶ尻古墳群に属し、別名やねや塚古墳という径18mの円墳である。2段築成で中段に埴輪列が巡る。主体部は河原石を使用した横穴式石室で、わずかに胴張りを有している。石室内からは鉄刀・刀子・鉄鎌・弓金具・鍔・耳環・玉類が、墳丘からは埴輪と須恵器が出土している。三ヶ尻古墳群は荒川左岸の河岸段丘上に位置し、60基以上もの古墳で形成されている。三ヶ尻林4号墳は古墳群のなかで唯一の前方後円墳である二子山古墳（全長55m）に次いで、最大級の規模をもつと考えられている。

【16】第6・9図16 写真42～47 ①塩（しお）古墳群III支群18号墳 ②大里郡江南町大字塩字西原 ③鉄刀（柄頭縁金具・無窓鐸・鍔） ④縁金具には側面だけではなく、平部片面にも円文が連続して施されている。鐸の文様は表裏異なっており、柄側は1列の2重C字状文が、鞘側には線で区画された2列のC字状文が施されている。耳にはC字状文が連続する。鍔には鍔の柄側と同様のC字状文が巡る。象嵌未表出。 ⑤江南町教育委員会 ⑥江南町 1995 ⑦瀧瀬実測（象嵌はX線写真による）。 ⑧塩古墳群は比企丘陵の北縁に位置する狭い丘陵上に分布している。III支群（西原群）は現在21基の円墳で形成され、18号墳は径22mと最も規模の大きい円墳である。主体部は凝灰岩の切石を使用した横穴式石室で、羽子板状で胴張りを有している。石室内から出土した遺物は、銀装大刀を含む鉄刀類をはじめ、鉄鎌・弓金具・刀子・霞珠・辻金具・鞍金具・鍔・耳環・玉類・須恵器・土師器がある。周溝からは埴輪が多量に出土している。

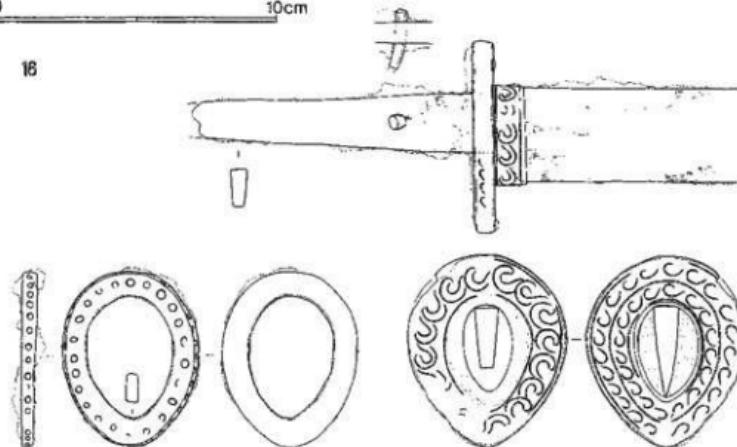
15



0

10cm

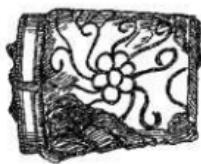
16



15. 熊谷市 三ヶ尻林4号墳 16. 江南町 塩古墳群III支群18号墳

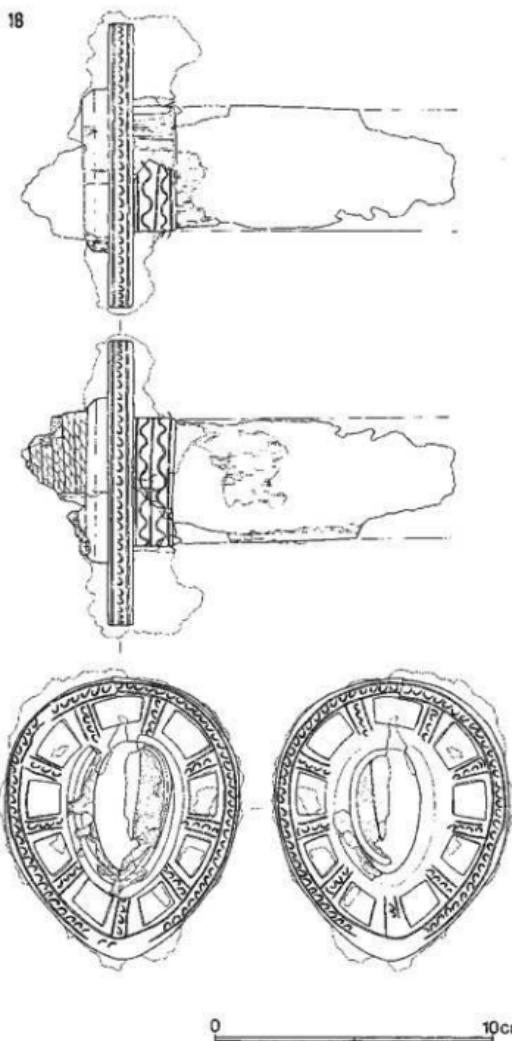
第6図 象嵌遺物(6) ( $S = 1/2$ )

17



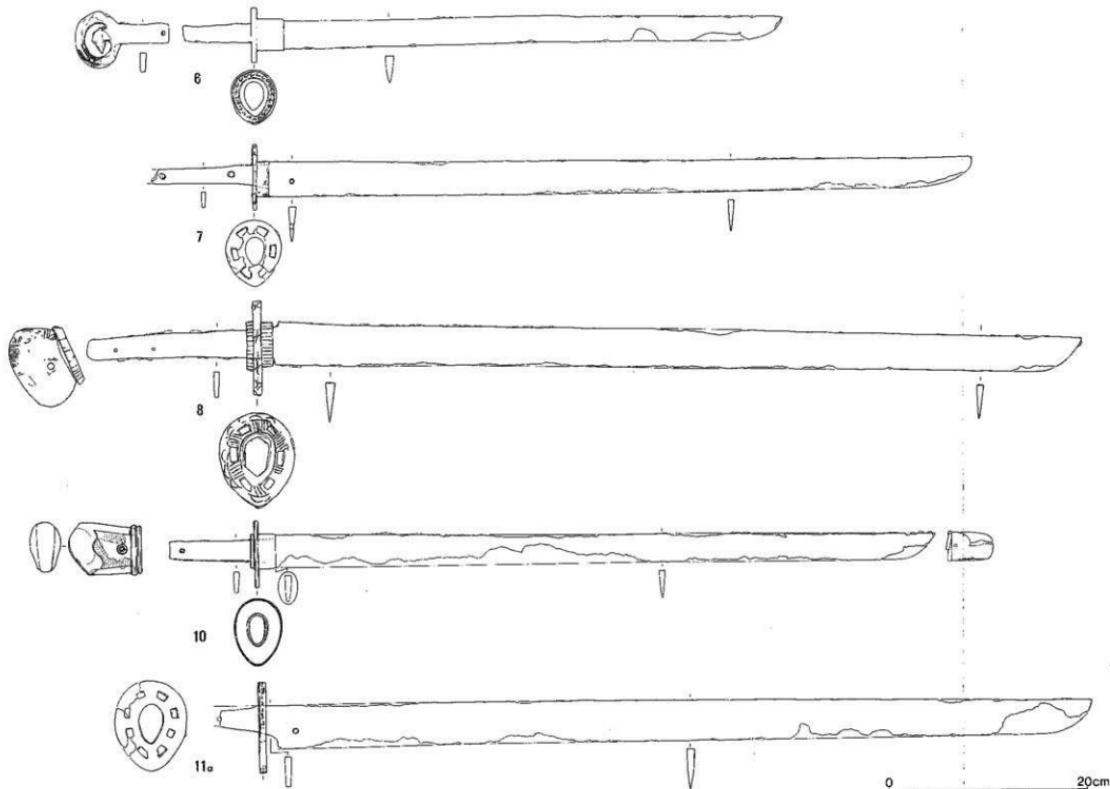
0 2cm

18



17. 行田市 将軍山古墳 18. 羽生市 永明守古墳

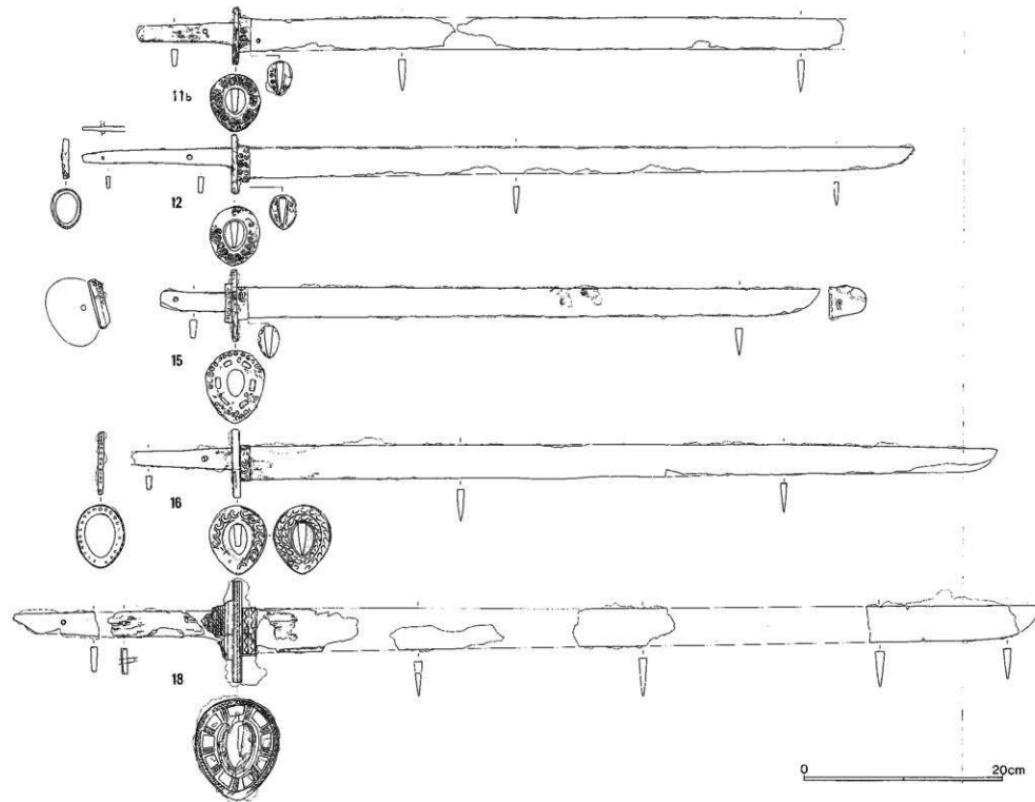
第7図 象嵌遺物(7) (17 S=1/1 18 S=1/2)



6. 告野町 稲荷塚古墳 7. 告野町 金崎古墳群 8. 美里町 塚本山137号墳 10. 美里町 広木大町5号墳 11a. 美里町 広木大町9号墳

第8図 集族装大刀(1) (S=1/4)





11b. 美里町 広木大町9号墳 12. 美里町 広木大町20号墳 13. 熊谷市 三ヶ尻林4号墳 16. 江南町 塩古墳群18号墳 18. 羽生市 永明寺古墳  
第9図 銅嵌装大刀(2) (S=1/4)



【17】第7図17 ①将軍山（しょうぐんやま）古墳 ②行田市埼玉 ③鞘口もしくは柄元 ④6弁の花文を中心に、放射状に巻手状の文様が施されている。 ⑤不明 ⑥柴田 1905 ⑦柴田 1905より転載。 ⑧將軍山古墳は埼玉古墳群の東部に位置する全長90mの前方後円墳で、後円部墳頂に片袖型の長方形横穴式石室をもつ。石室からの出土遺物は豊富で、三葉環頭大刀・三輪玉・鉄刀・鉢・鉄鎌・衝角付冑・挂甲小札・轡・雲珠・辻金具・鞍金具・鏡・杏葉・馬鈴・蛇行状鉄器・馬冑・銅鏡・石製盤・乳文鏡・玉類・須恵器などがある。墳丘および周溝からは埴輪や須恵器が出土している。埼玉古墳群は荒川と利根川に挟まれた埋没ローム台地上に位置する。県内有数の大規模古墳群で、県内最大の円墳である丸墓山古墳（径105m）、同じく最大の前方後円墳である二子山古墳（全長138m）、金象嵌銘鉄劍を出土した稻荷山古墳が含まれている。

【18】第7・9図18 卷頭写真5・写真48～53 ①永明寺（ようめいじ）古墳 ②羽生市大字下村君字谷田 ③鉄刀（九窓鋒・鍔） ④鍔の表裏と耳に、2条の直線間に連続するC字状文を充填する。鍔には直線と波線が交互に施されている。一部肉眼で観察できるが、象嵌は未表出。 ⑤永明寺（埼玉県立博物館保管） ⑥栗原・塩野 1969 ⑦藤瀬実測（象嵌はX線写真による）。 ⑧利根川に平行する自然堤防上に立地する。全長78mの前方後円墳であり、御廟塚古墳（前方後円墳）や稻荷塚古墳（円墳）が含まれる村君古墳群の主墳である。主体部は1931年（昭和6）に後円部墳頂にある薬師堂の下から発見された。その状況から、側壁に河原石を積み上げ、緑泥片岩を棺床と天井部に用いた竪穴式石室であったと推定されている。その際出土した遺物には鉄刀・刀子・鉄鎌・衝角付冑・挂甲小札・轡・鏡・鞍金具・雲珠・銅留金具・鏡・耳環がある。

### III 象嵌遺物の調査

象嵌遺物の調査は、象嵌を有するかどうかの調査から始めなくてはならない。古墳時代の象嵌遺物は、ほとんどが古墳から出土する鉄製品中に含まれ、象嵌表面は鉄鏽に覆われているのが普通である。そのため、出土後にこれらの象嵌をX線を使って早急に確認することがまず第一の調査である。次に保存処理を実施して、その劣化状態や象嵌技法に関する細部の調査を実施する。また、保存処理後資料の保管環境や経時変化の調査も今後継続して行うことが不可欠である。

ここでは、象嵌の確認調査と象嵌遺物の保存処理及び象嵌の表出について報告する。

#### 1. 確認調査

象嵌を有する鉄刀類は、通常鉄鏽に覆われており、外観からの肉眼観察では、象嵌の有無の確認是不可能である。そこで、まず確認調査として、象嵌を有する可能性の高い県内出土の鉄刀類について、X線透過検査を実施した。

##### (1) X線透過検査の方法

X線透過検査は、X線フィルム上に資料を乗せ、上からのX線照射によるX線透過撮影によって行った。検査に使用したX線検査装置は、県立埋蔵文化財センター設置の以下の装置である。

装置名 ソフテックス M-150W

最大管電圧	150kVp	100kVp
最大管電流	3 mA	5 mA
タイマー	デジタルタイマー	9分59秒9
使用X線管	SOFTE XI-1505 (Be窓)	焦点0.6×0.6mm
本体寸法	横幅1800	高さ1650 奥行800
防護方式	完全防護暗箱型	
撮影寸法	最大四切	

今回確認調査を実施した資料は、象嵌を有する可能性が高い鉄刀(刀装具)24例である(第1表)。X線照射等の条件は、資料の形状や劣化状態、X線照射の方向によってそれぞれ設定したが、概ね次のような条件のもとで実施した。

管電圧	80~150kVp
管電流	2 mA
照射時間	0.5~2分
焦点-フィルム間距離	80cm
フィルム	フジ IX100
現像	フジレンドール 20°C 5分

照射方向については、X線管が装置に固定のため、刀身に付着して取り外しのできない刀装具(鐔、籠など)については、可能な限り刀身に台などを添えて立てかけ、鐔の平面方向の透過像が得られるよう工夫した。また、象嵌を有する鉄刀からのものと思われる小破片についても検査を行った。この場合のX線の強度は、60kVp(その他の条件は、他と同じ)として、破片の輪郭をフィルムに写しこみ、後の選別や接合が容易になるようにした。

### (2) X線透過検査の結果

検査の結果、資料12点に象嵌があることが確認できた(第1表)。その内、検査番号1と2、3と4、13と14、18と22は、出土古墳や形状などから、セット関係になる可能性が高い。したがって、今回の検査で確認された象嵌装鉄刀は、伝金崎古墳群1振、塙古墳群第III支群18号墳1振、広木大町5号墳1振、9号墳2振、20号墳1振、永明寺古墳1振である。それに加えて、刀装具のみの出土に広木大町2号墳の鐔1点、大道古墳の鞘尻(もしくは円頭柄頭)1点があるから、合計9例の象嵌装鉄刀が確認できた。

### (3) 象嵌の文様と位置

X線透過撮影法は、X線が物体を透過する性質を利用した検査法であるから、対象が立体物であってもX線フィルム上には、2次元の平面的な透過像となって検出される。したがって、対象物の表裏の情報は、重なった像として写しだされる。

象嵌の施された遺物においても、X線透過像は表裏の象嵌が重なり合った複雑な像として写しだされる。そのため、象嵌の文様及び位置を把握するには、複数の方向から再度X線透過撮影を行い、表裏を分離する必要がある。分離作業では、複数方向からのX線写真をもとに、遺物の輪郭との位置関係や文様の規則性を考慮して、トレーシングペーパーへ写し取って行く。本稿で扱っている象

第1表 X線透過検査資料一覧

検査No	資料No	出土遺跡	名 称(部位)	所 有 者	象 嵌	備 考
1	【7】	金崎古墳群	鉄刀(付 鐔)	皆野町教育委員会	○	縄に象嵌
2	【7】	金崎古墳群	鍔	〃	○	
3	【16】	塙古墳群田18号墳	鉄刀(付 鐔・鍔)	江南町教育委員会	○	縄、縄に象嵌
4	【16】	塙古墳群田18号墳	鍔金具	〃	○	
5		諏訪林古墳	鍔	美里町教育委員会	—	
6		久保2号墳	鍔	〃	—	
7		久保1号墳	鍔	〃	—	
8		後街道2号墳	鍔	〃	—	
9		広木大町1号墳	鍔	〃	—	
10	【9】	広木大町2号墳	鍔	〃	○	
11		広木大町3号墳	鉄刀(付 鐔・鍔)	〃	—	
12		広木大町4号墳	鍔	〃	—	
13		広木大町5号墳	鉄刀(付 鐔)	〃	—	縄は金網装
14	【10】	広木大町5号墳	鞘尻	〃	○	金網装の鍔金具付着
15		広木大町5号墳	鞘尻	〃	—	
16	【11b】	広木大町9号墳	鉄刀(付 鐔・鍔)	〃	○	縄、縄に象嵌
17	【11a】	広木大町9号墳	鉄刀(付 鐔)	〃	○	鍔耳部に象嵌
18	【12】	広木大町20号墳	鉄刀(付 鐔・鍔)	〃	○	縄、縄に象嵌
19		広木大町20号墳	鉄刀(付 鐔・鍔)	〃	—	
20		広木大町20号墳	鍔	〃	—	
21		広木大町20号墳	鍔	〃	—	
22	【12】	広木大町20号墳	鍔金具	〃	○	
23	【5】	大道古墳	鞘尻もしくは円頭柄頭	滑川町教育委員会	○	
24	【18】	永明寺古墳	鉄刀(付 鐔・鍔)	永 明 寺	○	縄、縄に象嵌

既未表出の資料の実測図(第6図16・第7図18)には、この方法によって象嵌線を示している。

今回新たに象嵌を確認した各資料の象嵌文様と位置について、X線写真から簡単に触れておく。

資料【5】の滑川町大道古墳出土鞘尻(もしくは円頭柄頭)には、縁の部分に半円文が一つと、その上方に直線文が一つ確認できる。象嵌線の状態は悪く、鮮明ではない。

資料【7】の皆野町金崎古墳群出土鉄刀は、鍔及び鍔に象嵌がある。鍔には、耳にのみ重半円文がめぐると思われるが、残存する文様は僅かである。鍔には、溝文が2段にめぐる。

資料【9】の広木大町2号墳出土鍔には、大小のC字状文が透の間に、また、透の外縁を沿うに線が確認できる。象嵌線の状態は悪く、部分的に象嵌線の滲みも観察できる。耳には、線として確認できるが、詳細は不明である。

資料【10】の広木大町5号墳出土の鞘尻には、直線文が数条確認できる。象嵌線は、部分的に鉄地の亀裂によって分断されている部分がある。

資料【11a】の広木大町9号墳の鍔には、耳にのみ象嵌がある。鍔自体の残存率は、約70%程度である。象嵌は、直線で区画された中にC字状文がめぐる。象嵌線の幅は、C字状文の両端で太く、中央で細い。

資料【11b】の広木大町9号墳出土の鉄刀は、鍔及び鍔に象嵌がある。いずれも刀身に付着しており取り外しは不可能である。鍔には、ハート形文がめぐり、隙間は単純な線で充填している。象嵌の残りは良いが、部分的に象嵌線の劣化がみられる。鍔は剥落箇所が多く、X線写真からは判然

としない。

資料【12】の広木大町20号墳出土の鉄刀は、鐔及び鍔に象嵌がある。鐔と鍔は互いに付着している。鍔には、ハート形文がめぐるが、鉄地の状態は悪く、剥落箇所が多い。また、象嵌線の分断や鉄鏽蝕による盛り上がりが認められる。鍔は、S字状文がめぐる。鍔金具は、両縁部に半円文がめぐるが、剥落した部分が多い。本鉄刀から剥落した破片は多く、破片中にも象嵌線が確認できる。

資料【16】の塙古墳群第II支群18号墳出土の鉄刀は、柄頭縁金具、鐔、鍔に象嵌がある。鍔金具には、平部及び側面に円文がある。象嵌の残存状態は良好である。鍔は、表裏の文様が異なり、X線写真をもとに表裏を分離した結果、柄側は2重C字状文、鞘側は、2列に線で区画された範囲にC字状文がめぐる。象嵌の残存状態は良く、耳部と平部の一部が剥落しているものの、ほぼ完全な状態で残存している。鍔は、線で区画された範囲に2重のC字状文がめぐる。なお、鐔と鍔は刀身上に付着している。

資料【18】の永明寺古墳出土の鉄刀は、鐔及び鍔に象嵌がある。鍔は分断しており、鐔及び刀身にそれぞれ付着している。鍔には、圓線の中にC字状文がめぐる。透の間も同様である。象嵌の残存状態は良好である。鍔には、圓線によって2段に区画した範囲に波状文がめぐる。

## 2. 保存処理と象嵌の表出

今回の象嵌確認調査で確認した資料は、9例である。このうち、象嵌表出を含む保存処理を実施した資料は7例（第2表）である。また、資料【15】の三ヶ尻林4号墳出土の鉄刀は、既に1990年に岩本克昌、岩田明広両氏によって象嵌の確認がなされている。この資料は、翌年保存処理及び象嵌の表出を筆者（野中）が実施したので、あわせてここで報告する。

### （1）保存処理（象嵌の表出）の目的

鉄製遺物は、出土後の外的要因や内在する塩類などの影響から腐食が進行する。一般に鉄刀のような鍛造製品では、腐食の傾向として表面が腐食生成物（鏽）に伴って層状あるいは鱗片状に剥落していく特徴がある。したがって、鉄刀の表面に施された象嵌は、腐食に伴って鉄地とともに剥落する危険性が高くなっている。そのため早急な保存処理を必要とするが、その表面は通常鉄鏽に覆われており、象嵌の存在を外観から確認し得ないことが大きな障害となっている。出土後の保管時に起こる鉄製遺物の腐食に伴う象嵌の剥落を防止するには、積極的な象嵌確認調査と保存処理が必要である。

鉄製遺物は、保存処理後においても保管環境などによっては再び腐食が進み、鏽の発生や亀裂を生じる場合がある。しかし、合成樹脂の含浸による強化処理をしておくことによって、象嵌の存在する鉄製遺物表面の剥落は防止できると考えられる。

今回確認された象嵌遺物は、可能な限り象嵌の表出を実施している。象嵌の位置や文様形態は既にX線透過検査で把握しているものの、その部位によっては不確かな部分を残しておらず、表出することによってそれを確定することができる。また、表出作業の中には、象嵌細部や技法等の情報が得られる可能性がある。そして、象嵌を表出することによってはじめて象嵌が肉眼で観察可能な実資料として広く還元できることも表出の大きな目的である。

## (2) 保存処理（象嵌の表出）の方法

象嵌遺物の保存処理及び象嵌の表出作業は、基本的に以下の手順で行った。

- ①処理前調書作成（写真撮影含む）
- ②X線透過検査（象嵌の位置、劣化状態把握）
- ③象嵌部以外の部位鉄鏽除去（クリーニング）
- ④乾燥（熱風乾燥機）
- ⑤合成樹脂の減圧含浸
- ⑥象嵌の表出
- ⑦合成樹脂錆布
- ⑧補修等（接合・補塗）
- ⑨処理後調書作成（写真撮影含む）
- ⑩保管

処理前調書には、形状や保存状態を詳細に記録し、現状の写真撮影を行った。また、X線透過検査によって、鉄刀及び象嵌の劣化状態や脆弱部の把握に努めた。

象嵌の位置がほぼ確定できたところで、象嵌部以外の部位の鉄鏽を除去した。例えば、刀身に象嵌錆などが付着している場合には、合成樹脂含浸の前に刀身部に限って錆除去を行った。この時、象嵌部の表層錆が剥落しないよう細心の注意をはらい、過度の衝撃を与えないようにした。

脱塩は、象嵌の剥落を危惧して実施しなかった。

乾燥は、熱風乾燥機内（約105°C）で2日～3日間乾燥した。

強化処理は、アクリルエマルジョン（プライマル MV1・以下 MV1）を減圧下で含浸した。含浸後は室内で自然乾燥し、樹脂を硬化させた。樹脂含浸は1回である。

象嵌の表出は、象嵌の位置を把握した後、小型グラインダー（ミニターカ250）、カッターナイフ、竹串、エアーブラシ（SS-WHITE AIRBRASIVE6500）を用いて行った。荒削りは、小型グラインダーを使用し、遺物の形状、象嵌の位置等によって先端工具を使い分けた（主に全面荒削りにはMBA #130 J 004,007、細部はダイアモンドバー#130 Z 492, Z 439を使用）。象嵌線の表出は、象嵌の深さが一定ではないため、象嵌線の一部が露出した段階でエアーブラシで表層の錆を除去した。したがって、荒削りは全面的に行なったが、その後は局部を実体顕微鏡で観察しながら小型グラインダー、カッターナイフ、エアーブラシを使用して少しずつ表出していった。表出作業中で錆瘤による象嵌線の浮き上がりや鉄地の亀裂等が確認される場合は、鉄地の間隙部に充填剤（マイクロバルーンとセメダインCかまたはエポキシ系接着剤の混合）を詰め、象嵌の乗る下地を強化した。

象嵌表出後は、象嵌部に合成樹脂（パラロイドB-72キシリソル）を塗布し、象嵌線の腐食と剥離を防止するようにした。

処理後の調書には、使用した薬剤の種類や処理方法、保存処理作業中に得られた知見などを記録した。

象嵌遺物の保管方法については、埼玉稻荷山古墳の辛亥銘鉄劍（江本 1982）や江田船山古墳の銀象嵌銘大刀（青木 1993）などのように、保管ケース内を不活性ガスで充填し、酸化を防ぐ方法が報告されているが、コスト等の問題があり、手軽な方法として乾燥状態を保ったアクリルケース内に保管することを検討した。資料【15】の三ヶ尻林4号墳出土の鐵刀はこの方法で保管した。また、各資料の所有者には、乾燥状態を保った密閉ケース内に保管し、温湿度のなるべく一定した場所へ保管するよう助言することとした。また、処理後の経時変化を定期的に記録することとした。

### （3）各資料の保存処理（象嵌の表出）の実際（第2表）

#### 【5】滑川町大道古墳出土鞘尻（もしくは円頭柄頭）（第1図5 写真6・7）

鞘尻もしくは円頭柄頭である。本例は1986年に既に保存処理が行われており、合成樹脂の合浸がなされている。全長3.90cm、幅3.14cm、重量22.60gである。X線による確認調査で、今回新たに縁の部分に象嵌を発見した。文様は、半円文とその上方に直線が一つずつ残存する。樹脂合浸が行われているため、鉄地はしっかりしている。

象嵌の表出は、小型グラインダー、カッターナイフ、エアーブラシを使用したが、象嵌線の残存状態は極めて悪く、象嵌溝らしき痕跡は確認できるものの、象嵌線は明確に観察できなかった。しかし、処置後のX線透過写真には、象嵌線が写し出されており（写真7）、あるいは表出が不十分であったかもしれない。ここでは、鉄地の状態等を考慮し、研ぎ部にパラロイドB72-10%キシレン溶液を塗布して、ひとまず終了とした。

#### 【7】皆野町金崎古墳群出土鉄刀（第2図7 写真8～11）

刀身、鐔、鍔からなる。このうち、鍔及び鐔に象嵌がある。刀身は全長83.0cm、刃幅3.4cm、厚さ0.8cmである。鍔は、茎に残存する目釘によって取り外し困難となっている。鐔は内縁の欠損が著しく、刀身から遊離している。鐔は全長6.6cm、幅5.6cm、厚さ0.5cm、重量20.89である。鍔は全長3.5cm、幅1.3cm、厚さ0.36cm、重量14.14gである。

刀身、鐔、鍔とも黒褐色を呈しており、部分的に黄褐色の粉状の鏽が上層を覆う。鉄製造物によくみられる土や石粒を含んだ黄褐色の薄い鏽は既に剥落したものと思われる。象嵌の残存は少なく、特に鐔の象嵌は剥落が著しい。

保存処理は、まず、象嵌部以外の部分の表層鏽をエアーブラシで除去した。熱風乾燥機で乾燥後、MVIを減圧合浸した。象嵌表出には、小型グラインダーとエアーブラシを主に使用した。表出の結果、象嵌の材質は銀（色調から判断）で、嵌入状態は比較的の良好であった。また、象嵌部のみにパラロイドB72-10%キシレン溶液を塗布した。

#### 【9】美里町広木大町2号墳出土鐔（第4図9 卷頭写真3・写真12・13）

六窓の鐔である。残存率は約50%で、2片に分離している。全長7.87cm、幅4.05cm、厚さ0.55cmで、重量は38.10gである。

保存状態は悪く、全体を土及び石粒を含んだ灰褐色の鏽が覆い、鏽瘤もみられる。破損部は黒色を呈し、出土後の破損である。象嵌は、平部と耳部にある。象嵌自体の状態は悪く、渾然と模様を呈する部分がある。

保存処理は、まず、MVIを減圧合浸後、小型グラインダーで時間をかけて鏽を除去していった。

第2表 保存処理(象嵌表出)資料一覧

資料No	出土古墳	象嵌部位	処理前重量(g)	処理後重量(g)	象嵌の残存状態	備考
【5】	大須古墳	鞘尻(柄頭)	22.6	22.56	極めて悪く象嵌溝も浅い。	1986年強化処理済
【7】	金崎古墳群	鉗 鍔	20.89 14.14	20.81 13.90	鉄地とともに剥落多い。 剥落多い。嵌入状態は比較的良好。	刀身から取外し不可能
【9】	広木大町2号墳	鉢	38.10	28.45	銀線の剥食進み、滲みを生じている。	
【10】	広木大町5号墳	鞘尻	20.80	18.96	鉄地とともに剥落多い。	企鋼製縁金具付着
【11a】	広木大町9号墳	鉢	94.71	75.16	鉄地とともに剥落多い。	
【11b】	広木大町9号墳	鉢 鍔	329.18 (刀身含む)	300.50	残存状態は良い。鉄錆瘤による分断跡あり。 鉄地とともに剥落多い。	刀身に付着
【12】	広木大町20号墳	縁金具 鉢	10.74 78.47	10.49 75.54	銀線及び鉄地の状態悪い。鉄錆瘤による分断、盛り上がりあり。	剥落破片中に象嵌残存。刀身に付着
【15】	三ヶ尻林4号墳	鍔 縁金具 鉢 鍔	20.07 9.48 727.98 (刀身含む)	19.02 9.20 715.37	銀線の嵌入状態比較的良好。 鉄地の状態悪い。銀線の嵌入状態は比較的良好。 鉄地の状態悪く、錆瘤による盛り上がり、分断箇所多い。 鉄地とともに剥落した部分あり。嵌入状態は比較的良好。	刀身に付着
		鞘尻	28.04	27.70	鉄地とともに剥落した部分多い。	刀身に付着

象嵌の表出には、カッターナイフとエアーブラシを主に用いた。表出後は、象嵌部にパラロイドB72-10%キシレン溶液を塗布した。象嵌表出の結果、材質は銀(色調から判断)で、銀線自体の嵌入状態は悪く、凹凸がある。象嵌溝も浅い。また、接合にはエボキシ系接着剤(セメダインハイスター)を用い、間隙部にはマイクロバルーンとエボキシ系接着剤の混合剤を充填した。

#### 【10】美里町広木大町5号墳出土鞘尻(第4図10 卷頭写真4・写真14・15)

約2分の1を欠く。全長4.83cm、幅2.93cm、厚さ0.66cm、重量18.68gである。全体を橙黄褐色の錆が覆い、一部黒色の下層の錆が露出する。また、一部破損し、分離している。縁には金銅製の縁金具の一部が付着している。

保存処理は、象嵌部以外の部位にある錆瘤などの主な錆を除去し、MVIを減圧充満した。分離部の接合は、象嵌表出前にエボキシ系接着剤を行った。また、金銅製の縁金具は、全体を鉄錆が覆っていたので、樹脂含浸の前に竹串等で物理的に除去した。象嵌の表出は、小型グラインダーとエアーブラシを主に用いた。象嵌表出の結果、材質は銀(色調から判断)で、嵌入状態はあまり良くない。銀線の表面は平滑ではなく、中央部がやや陥没して溝状に見える部分がある。表出後は象嵌の部分

にパラロイドB72-10%キシレン溶液を塗布した。

【11a】美里町広木大町9号墳出土鉄刀（第4図11a 写真16・17）

刀身と鐔からなる。このうち鐔の耳部のみ象嵌がある。刀身は、全長88.0cm、刃幅4.20cm、厚さ0.87cm、重量975.29gである。鐔は既に刀身から遊離しており、約4分の1を欠く。鐔の全長は、9.16cm、幅6.12cm、厚さ0.86cmで重量は9.71gである。

刀身は、切先付近の破損が著しく、鍔瘤の剥落に伴う欠損や抉れ部がみられる。

鐔は全体を黄褐色の錆が覆い、破損部は黒褐色を呈する。X線透過検査では、破損して分離した破片中にも象嵌が確認されたが接合部が見当たらない。分離した破片には土及び石粒が混在した銷痕が強固に付着している。

保存処理は、まず、刀身及び鐔の平部をエアーブラシでクリーニングした。熱風乾燥後MV1を減圧含浸し、鉄地を強化した。樹脂含浸は、鐔の破片についても行った。象嵌の表出は、小型グラインダーとエアーブラシを主に用いた。分離した破片には錆が厚く付着しており、小型グラインダーで時間かけて除去した。象嵌表出の結果、材質は銀（色調から判断）で、銀線自体の状態はあまり良くない。表出後は象嵌部にパラロイドB72-10%キシレン溶液を塗布した。

【11b】美里町広木大町9号墳出土鉄刀（第4図11b 卷頭写真1・写真18~23）

刀身、鐔、鍔からなる。鐔及び鍔は刀身に付着しており、取り外し不可能である。刀身は二つに分断しているが、接合面は無い。また、切先部は欠損している。刀身の残存長は71.0cm、刃幅3.10cm、厚さ0.8cmである。鐔は、全長5.84cm、幅5.14cm、厚さ0.88cmである。鍔は全長3.61cm、幅2.75cm、側面幅1.18cmである。総重量は669.19gである。

刀身は、土及び明褐色の錆が全体を覆う。数ヶ所に表層錆の剥落によって黒色の下層錆が露出する部分がある。鐔及び鍔も刀身と同様の錆に覆われるが、比較的残りは良い。しかし、鐔の耳部には亀裂がみられ、層状剝離の危険性がある。また、平部に象嵌線の露出している部分があり、黒色に変色している。鍔は一部大きく抉れたような部分があり、錆の剥落によるものと思われる。

保存処理は、刀身部をまず竹串やエアーブラシを用いてクリーニングした。熱風乾燥後MV1を減圧含浸して強化した。象嵌の表出には小型グラインダーとエアーブラシを用いた。象嵌表出の結果、材質は銀（色調から判断）で、銀線の嵌入状態は良好であった。表出後の象嵌部にはパラロイドB72-10%キシレン溶液を塗布した。

【12】美里町広木大町20号墳出土鉄刀（第5図12 卷頭写真2・写真24~31）

刀身、鐔、鍔からなる。このうち鐔及び鍔に象嵌がある。鐔と鍔は付着しており、取り外し不可能である。刀身の全長84.0cm、刃幅2.96cm、厚さ0.81cm、重量497.11gである。鐔は全長5.94cm、幅5.05cm、厚さ0.54cmである。鍔は、全長3.74cm、幅2.62cm、側面幅1.30cmである。鐔と鍔の重量は78.47gである。

刀身、鐔、鍔とも保存状態は悪く、表面の錆層は層状あるいは鱗片状に剥落寸前で、非常に脆弱な状態である。したがって、剥落した破片が多く、その中には象嵌を含む破片もある。鐔及び鍔には、所々に象嵌線の露出がみられ、錆瘤によって浮き上がっているものや、象嵌溝から完全に外れて線同士が絡み合うような部分もみられる（写真25）。

保存処理は、まず、刀身部を竹串、エアーブラシでクリーニングし、表面の土や灰褐色の鏽を除去した。クリーニングは刀身部だけにとどめ、鐔及び鍔は乾燥後直ちにMV1を減圧含浸し、鉄地の剥落を防止した。象嵌の確認された破片も樹脂含浸し、X線写真と照合しながら元位置に戻し、接合（セメダインC）した。また、鉄地剥離部の間隙にはマイクロバルーンとエボキシ系接着剤の混合剤を充填した。象嵌の表出には、小型グラインダー、カッターナイフ、エアーブラシを使用した。表出時にも象嵌線の剥落が危惧される部分には充填剤を使用した。象嵌の材質は銀（色調から判断）である。表出後は象嵌部にバラロイドB72-10%キシレン溶液を塗布した。

#### 【15】熊谷市三ヶ尻林4号墳出土鉄刀（第6図15 写真32~41）

刀身、鐔及び鍔、柄頭縁金具、柄元縁金具、鞘尻からなる。象嵌は、鐔及び鍔、柄頭縁金具、柄元縁金具、鞘尻にある。

刀身の全長は66.2cm、刃幅は2.90cmである。ほぼ完形である。全体に土の混在する黄褐色の鏽が覆い、鱗片状に剥離しているものの、地金は良好に残っている。

鐔及び鍔は、共に刀身に付着し、取り外しは不可能である。表面は刀身と同様な鏽に覆われ、鏽瘤も多く認められ、凹凸が激しい。そのため、象嵌は浮き上がりが多く、深さも一定ではない。

柄頭縁金具は、全長5.27cm、側面幅1.33cm、重量20.07gである。約4分の1を欠損する。象嵌は、側面に二段にわたって半円文が施されるが、鉄地の剥落が多く、辛うじて残存する表層鏽の部分のみに残っている。

柄元縁金具は、全長4.0cm、幅2.98cm、厚さ0.62cm、重量9.48gである。鏽瘤による鉄地の剥落のため、外縁が整った曲線にならず、抉られたような状態である。全体を黄褐色の鏽が覆う。

鞘尻は、全長3.67cm、幅3.31cm、厚さ0.25cm、重量28.04gである。層状の剥離と亀裂が多く、象嵌の残存状態は良くない。一部象嵌線の露出する部分がある。

保存処理は、刀身部のみ樹脂含浸前にクリーニングを行っただけで、その他は乾燥後直ちにMV1を減圧含浸し、鉄地を強化した。象嵌の表出には小型グラインダー、カッターナイフ、エアーブラシを用いた。鉄地の状態は鐔及び鞘尻が特に悪く、鏽瘤による象嵌線の分断や浮き上がりが多くみられた。また、鏽瘤によって生じた間隙部には、充填剤（マイクロバルーンとセメダインCの混合）を詰め、剥落を防いだ。象嵌の材質は銀（色調から判断）で、表出後はB72-10%キシレン溶液を塗布した。

## IV 象嵌装大刀の分析

### 1. 鐔の耳にのみ象嵌を施す大刀

鐔の耳にのみ象嵌が施される大刀は、県内では【1】山王塚古墳例、【4】久米田古墳群例、【7】金崎古墳群例、【11a】広木大町9号墳例と出土例が多い。鐔の耳に象嵌があり、平の部分には施されないという条件を満たす類例を捜すと、全国で55の例を確認することができた。これらを鐔や鍔など、他の要素も考慮に入れて集成了したのが第3表である。

この集成了から、これらの大刀がいくつかの共通する特徴をもつことが明らかとなった。まず、刀身は片闇のものが多く、全長80cm以上の長大なものとなる傾向が認められる。また、鐔と鍔以外の

部分に金属製の装具を用いないものがほとんどを占めている。そこで、こうした特性をもつ大刀を「耳象嵌装大刀」と仮称して、象嵌装大刀の一型式として位置づけることにしよう。耳象嵌装大刀は、鐔とその象嵌文様（第10図）に着目するとさらに次のように細分することができる。

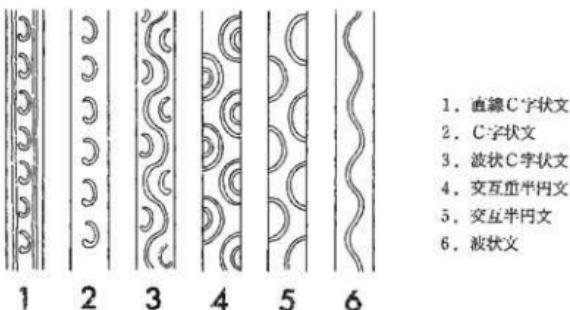
- I 八窓鐔で直線C字状文（2条の直線の間に勾玉形のC字状文が連続するもの）が施されるもの。
- II 無窓鐔で直線C字状文が施されるもの。
- III 六窓鐔で直線C字状文が施されるもの。
- IV 無窓鐔でC字状文のみが施されるもの。
- V 有窓鐔で、波状C字状文（波状文を中心として左右交互にC字状文が連続するもの）が施されるもの。
- VI 八窓鐔もしくは六窓鐔で、交互（重）半円文（半円文もしくは二重の半円文が交互に連続するもの）が施されるもの。
- VII 八窓鐔で波状文が施されるもの。

I式は【1】～【11a】など16例存在する。城山1号墳例が代表的である。II式は安造田東3号墳例である。I式とII式は耳象嵌装大刀の典型的な形といえる。III式にあたるのは【4】のみで、鋸元孔に象嵌を施す。IV式には3例あるが、石塚谷古墳例は刀身に竜や魚の象嵌が施されており、特異例といえよう。V式は推測も含めて八窓鐔のものが11例、六窓鐔のものが4例、その他および不明が5例含まれている。I式およびII式と同じく、鐔に象嵌は認められない。VI式は2例認められるが、【7】のように鐔に象嵌を施すものがある。刀身は両例とも両闇である。VII式としては武者塚古墳例の一例のみがあげられる。

集成表にあげた出土例のうち、耳象嵌装大刀I～VII式に含まれないものとして、宇洞ヶ谷横穴出土の銀金銅装円頭大刀と中原4号墳出土の鹿角装剣がある。耳のみに象嵌を施してはいるものの、他の柄からも「象嵌装大刀」の範囲には入らない。また、柄頭もしくは鞘尻と考えられる円頭状金具をもつ山崎2号墳例と山名原口II～2号墳例も、ここでは除外して考えておく。特に前者は短刀の部類に入り、今回設定した本型式からは大きく逸脱する資料といえよう。

有窓鐔のなかでも、六窓鐔の出現は八窓鐔よりも新しいことが指摘されている（新納 1984、白杵 1984b）。したがって、そのほとんどが八窓鐔に施される直線C字状文が、この中では古い段階の文様と考えられる。八窓鐔と六窓鐔の両者に認められる波状C字状文はその次の段階であり、C字状文も両側の直線が省略されたものとみなされる。さらに、交互（重）半円文は、波状C字状文の波状文と交互に配されるC字状文が変化して成立したものと考えられよう。他の部分への象嵌の有無や刀身の型式も加味すると、有窓鐔ではI→III・V→VI、無窓鐔ではII→IVという型式学的変化を設定することができる。

各型式の年代は、六窓鐔の出現がTK209型式期と考えられることや、共伴する須恵器などから、IおよびII式がTK43型式期に、III～V式がTK209型式期前半に、VI式はTK209型式期後半に相当すると考えられる。VII式の武者塚古墳例は刀身にやや新しい要素がみられ、鐔の平面形がI式のものと比較して円形にちかいため、I式よりは新しい段階のものと思われる。TK209型式期であろう。



第10図 鐔の耳の象嵌文様模式図（一部）

ただし、波状文それ自体は、ここでは除外した古いタイプの円頭大刀（TK43型式期）である宇洞ヶ谷横穴例にも施されており、それ以前から採用されていた文様と考えられる。VI式に施される交互（重）半円文それ自体は、刀身が極端に短い山崎2号墳例の存在から、さらに年代が降る可能性がある。

耳象嵌装大刀は、I式のものがオリジナルとなり、それ以降継続して製作されたと推定される。横田義章氏がその可能性を指摘されたように（横田 1993）、鐔の象嵌の基本的な施文位置が周縁部すなわち耳にあると仮定すると、ここで検討した象嵌文様の変化は、耳と平両方に象嵌がみられる鐔をもつ象嵌装大刀においても、応用することができるものと推察される。

## 2. 環頭大刀

象嵌装の単鳳環頭大刀は例が少なく、韓半島を含めても、7例ほどの出土をみるのみである。稻荷塚古墳出土の単鳳環頭大刀【6】は、橋本氏によって5世紀の年代が与えられている（橋本 1993）が、これには何の根拠も示されていない。柄頭の茎部は比較的長いものの、刀身茎部と直接連結される型式ではないと考えられること、倒卵形で扁平な無窓鐔を有すること、さらに、刀身の形成が不均等両側一文字尻細茎と推定され、TK43～TK209型式期のものであること（臼杵 1984a）、以上3点の理由により、【6】の年代を6世紀後葉頃と考えたい。

## 3. 頭椎大刀

塚本山137号墳例【8】は、象嵌装の頭椎大刀（全国16例）のうち、柄の描っている数少ない資料といえる。ただし、柄頭は刀身の切先近くから、縁金具と柄頭縁金具は入れ子に重なって出土しており、2次的な移動が想定される。刀身は不均等両側一文字尻細茎に相当し、TK43～TK209型式期にあたる（臼杵 1984a）。橋本氏は柄頭の危甲繁鳳凰文と鐔の象嵌文様を第四段階（6世紀後葉～末）（註2）に位置づけられている（橋本 1993）が、鐔の耳に施された文様（交互半円文）から、【8】はTK209型式期でも新しいものと考えられる。

第3表 鐙の耳のみ象嵌を施す大刀集成表

No	遺跡名	所在地	材質	輝	大きさ(cm)	耳の文様	型式	縦
1	八幡4号横穴	福島県いわき市	銀	一	—	波状C字文	(Y)	—
2	八幡横穴群	福島県いわき市	銀	八 密	8.4×7.2	波状C字文	V	—
3	郭内横穴群	福島県白河市	銀	八 密	—	波状C字文	(V)	—
4	圓教寺山7号墳	茨城県取手郡牛堀町	鐵	八 密	7.2×6.0	波状C字文	V	—
5	松延2号墳	茨城県新治郡千代田町	?	無	7.8×6.0	C字文	IV	○?
6	武者塚古墳	茨城県新治郡新治村	銀	八 密	10.6×9.7	波状	VII	○
7	飯塚1号墳	栃木県小山市	銀	六 密	7.5×6.4	波状C字文	V	×
8	山崎2号墳	栃木県真岡市	金	六 密	7.2×5.5	交互互半円文	—	○
9	上野原12号墳	栃木県利根郡南埼玉町	金	八 密	9.1×7.3	直線C字文	I	○
10	大道原出土品	群馬県高崎市	?	?	7.4×6.4	波状C字文?	V	?
11	山名原口II-2号墳	群馬県高崎市	鐵	八 密	8.0×6.8	波状C字文?	—	—
12	石原付近出土品	群馬県渋川市	?	十二密	9.8×8.6	不明	—	—
13	伝三本木出土品	群馬県藤岡市	?	十三密	8.0×6.7	不明	—	—
14	群馬原内出土品	群馬県	銀	八 密	10.0×8.1	直線C字文	—	—
15	山王塚古墳	埼玉県大宮市	銀	六 密	7.9×6.5	直線C字文	III	—
16	久米田古墳群	埼玉県比企郡古見町	銀	六 密	—	直線C字文	VI	●
17	金崎古墳群	埼玉県秩父郡皆野町	銀	六 密	6.6×5.6	交互互半円文	I	×
18	広木大町9号墳	埼玉県児玉郡美郷町	銀	八 密	9.1×7.3	直線C字文	(V)	○
19	法皇塚古墳	千葉県市川市	銀	—	—	波状C字文	V	○
20	大袋出土品	千葉県成田市	銀	六 密	8.0×—	波状C字文	V	○
21	石川阿ら地019号古墳	千葉県佐倉市	銀	八 密	7.6×6.1	C字文	IV	○
22	石川阿ら地019号古墳	千葉県佐倉市	銀	無	8.8×7.3	直線C字文	I	—
23	将門2号墳	千葉県佐倉市	銀	十密?	—	波状C字文	V	—
24	城山1号墳	千葉県香取郡小見川町	銀	八 密	7.7×6.8	直線C字文	I	—
25	城山1号墳	千葉県香取郡小見川町	銀	八 密	8.1×6.8	直線C字文	I	—
26	城山1号墳	千葉県香取郡小見川町	銀	八 密	8.1×7.1	直線C字文	I	—
27	山林丘陵横穴	神奈川県横浜市	?	?	—	不明	—	—
28	林原1号墳	神奈川県厚木市	銀	八 密	9.6×7.3	波状C字文	—	—
29	三ノ宮出土品	神奈川県伊勢原市	銀	六 密	7.7×6.7	波状C字文	V	—
30	森(將軍塚)12号墳	老野原更埴市	銀	六 密	7.4×6.3	不明	V	—
31	天白古墳	長野県諏訪郡下諏訪町	銀	六 密	7.1×5.8	波状C字文	V	—
32	平城2号墳	静岡県磐田市	銀	八 密	7.0×6.0	波状C字文	V	—
33	瓦窯西B3号墳	静岡県磐田市	銀	八 密	9.1×8.0	直線C字文	V	—
34	水掛渡A2号墳	静岡県磐田市	銀	八 密	8.7×7.4	直線C字文	I	—
35	中原4号墳	静岡県磐田市	銀	八 密	10.0×8.6	交互互半円文	VI	—
36	中原4号墳	静岡県磐田市	銀	八 密	—	波状C字文	V	—
37	宇洞ヶ谷横穴	静岡県掛川市	銀	無	5.8×4.9	波状	—	—
38	南山古墳(第1主体部)	三重県伊勢市	銀	八 密	8.2×7.0	直線C字文	V	—
39	石塚古墳	三重県多気郡多気町	銀	無	—	C字文	I	—
40	すもぐ古墳	滋賀県近江八幡市東町	銀	八 密?	9.0×7.5	直線C字文	V	—
41	中坂5号墳	京都府福知山市	銀	—	—	波状C字文	V	—
42	神宮谷3号墳	京都府綾部市	銀	八 密	8.3×6.5	不明	—	—
43	細谷4号墳	京都府綾部市	銀	八 密	9.2×7.6	直線C字文	V	—
44	三川古墳(第2主体部)	大阪府岸和田市	銀	八 密	7.2×6.2	波状C字文	V	—
45	大石古墳	大阪府八尾市	銀	八 密?	—	波状C字文	V	—
46	平瀬2号墳	岡山県御津市	銀	八 密?	9.8×8.7	直線C字文	V	—
47	西山2号墳	岡山県岡山市	銀	八 密?	9.1×7.4	直線C字文	V	—
48	川戸2号墳	岡山県美作郡大原町	銀	八 密?	7.3×6.1	波状C字文	V	—
49	安造田東3号墳	香川県仲多度郡満濃町	銀	無	6.6×6.0	直線C字文	II	—
50	川の上13号墳	徳島県京都市豊島町	銀	八 密?	8.0×6.8	直線C字文	I	—
51	ガランヤ2号墳	大分県日田市	銀	八 密?	7.8×6.7	波状C字文	V	—
52	七ノ原40号横穴	大分県下毛郡三光村	銀	六 密	6.8×6.0	波状C字文	V	—
53	西都原古墳群	宮崎県西都市	銀	八 密?	—	波状C字文	V	—
54	不詳	—	銀	八 密?	7.4×6.0	波状C字文	V	—
55	不詳	—	銀	八 密?	7.9×7.0	不明	V	—

縦元孔	鉄刀の形制	全長×既大綱	備考	文献
—	—	—		いわき市 1976 西山 1986
—	—	—		西山 1986
—	—	—		松田・今津 1992
—	—	—		西山 1986 茂木 1980
○ 片闊一文字尻細茎?	101.0×4.0			西山 1981 山本 1980
○ 不均等両闊一文字尻細茎	91.8×3.6			岩崎 他 1986
×	撫角片闊細茎	(91.2)×3.9		秋山 1985 西山 1986
×	均等両闊栗尻小細茎	38.5×3.0	円頭金具あり	佐野市郷土博物館 1986
○ 撫角片闊一文字尻細茎	106.6×4.3			南河内町 1992
○ 撫角片闊一文字尻細茎	100.1		組み合わせ推定 円頭金具あり	東京国立博物館編 1983
—	—	—		福田・戸戸 1991
—	—	—		東京国立博物館編 1983
—	—	—		東京国立博物館編 1983
—	—	—		東京国立博物館編 1983
● 撫角片闊	—	[1]		東京国立博物館編 1986
○ 不均等両闊細茎	(83.3)×3.5	[4]		若林 1899 河野 1935
○ 撫角片闊細茎	(88.6)×4.3	[7]		皆野町 1988
—	—	[11a]		美里町 1986
—	—	—		小林・熊野 1976
—	—	—		小倉・三門 1982
×	斜角片闊一文字尻細茎	78.3×3.2		喜多 1993
×	斜角片闊一文字尻細茎	(50)×4.0		喜多 1993
—	—	—		東京国立博物館編 1986
○ 不均等両闊一文字尻細茎	92.8×4.0			丸子 1978
×	撫角片闊扶尻細茎	105.5×4.1		丸子 1978
○	撫角片闊扶尻細茎	(102.8)×4.7		丸子 1978
—	片闊脚扶尻?	—		東京国立博物館編 1986
×	撫角片闊一文字尻細茎	92.7×3.3		原木市 1993
—	—	—		東京国立博物館編 1986
—	—	—		森将軍塚調査団 1992
—	—	—		神林 1940 藤森 1963
—	—	—		間村 他 1992
—	—	—		向坂 他 1991
—	—	—		山村 他 1965
○ 直角片闊扶尻細茎	99.0×3.8	鹿角装剣		富士市教育委員会 1994
×	両闊	(95.0)×4.1	銀金刷装円頭大刀	富士市教育委員会 1994
×	片闊	85×—		西山 1986 向坂 他 1971
×	劍	—	刀身に象嵌	岩中 他 1982
●	—	—		多気町教育委員会 1992a+b
×	撫角片闊扶尻細茎	99.4×3.6		滋賀県埋蔵文化財センター 1993
×	両闊?	(71)×3.4		木本・平良 1972
—	—	—		片岡 1994
—	片闊脚扶尻細茎	79.0×3.5		森下・森 1993
—	—	—		駒井 1993
×	撫角片闊一文字尻細茎	78.0×3.6	組み合わせ推定	坪田 1995
○	撫角片闊扶尻?細茎	85.0×3.5		葛原 1993
×	撫角片闊脚扶尻?細茎	97.5×4.4		福田・内藤 1996
—	—	—		宇野 1995
×	直角片闊一文字尻細茎	(72)×3.7	組み合わせ推定	高橋・梅川 1991
×	撫角片闊脚扶尻細茎	78.9×2.9	組み合わせ推定	横田 1993
—	—	—		小柳 他 1986
○ 不均等両闊一文字尻細茎	(83)×3.8			村上 他 1992
×	撫角片闊一文字尻細茎	94.8×3.6		茂山 1978
—	—	—		小川 他 1988
—	—	—	井上コレクション	福島県立博物館 1988

\*鉄刀の形制は白井1984aによる。( ) 推定 ○あり ×なし ●象嵌あり 不明もしくはデータ不足

三ヶ尻林4号墳例【15】は、鞘尻が刀身の切先に接して出土しており、他の副葬品の出土状況をみても、追葬や盜掘などによる移動をあまり受けていないことがわかる。縁金具の出土地点は明示されていないが、鍔などに象嵌の施されていない他の鉄刀に付属するものではなく、象嵌装大刀の装具と断定してよいだろう。この縁金具は、ハの字状に広がる形態から、頭椎柄頭の縁金具と考えられる。したがって、【15】は、柄頭だけが失われたものとは考えにくく、残りにくい木製もしくは有機質製の柄頭をもつ頭椎大刀であったと推定される。同様の出土例として、兵庫県西紀町の沢の浦2号墳例（市橋他 1987 第11図1）をあげることができる。施文の構成は異なるが、【15】とほぼ同様の柄をもつ。この大刀は追葬によって原位置こそ保っていないが、他に鉄刀類は出土していないため、象嵌装大刀柄の良好な例として注目される。

群馬県高崎市の隱居山古墳から出土した頭椎大刀（後藤 1936）は、柄頭の縁金具や切羽は金銅製であるが、柄頭自体は木芯の頂部に筋金をまわす構造をもつ。同じ高崎市の綿貫觀音山古墳出土の頭椎大刀（梅沢 1990）は、木芯に筋金をまわしたうえで、金銀の薄板で覆輪状におおっている。また特殊な例かも知れないが、奈良県奈良市の西隆寺跡からは木製の頭椎柄頭そのものが出土している（黒崎他 1976）。次項で述べる円頭大刀にも同様の柄が知られており、木などの柄頭に縁金具をあしらう象嵌装の頭椎大刀の存在は決してありえないものではないと考える。

【15】の鍔は六窓鍔であり、鉄刀の型式からみても、その年代はTK209型式期と考えられる。沢の浦2号墳例は八窓鍔ではあるが、耳の交互重半円文から【15】と同様にTK209型式期のものと推定される。柄頭が木製の象嵌装頭椎大刀すべてが、この年代に属するとは断定できないが、現在の知見では6世紀末から7世紀初頭にかけて盛行していたと見るべきであろう。

なお、【15】の鞘尻には、鍔と同様の「ハート形文」が施されているものと推定される。同じモチーフの円頭状金具は、千葉県芝山町の山田4号墳（早稻田大学考古学研究会 1963）や、栃木県真岡市の山崎2号墳（佐野市郷土博物館 1986）、福岡県八女郡広川町の鬼塚2号墳（川述他 1986 第11図2）などから出土している。これらを橋本氏は柄頭と断定し、亀甲繋鳳凰文の系譜の中で、年代の下った段階のものとされている（橋本 1993）が、今後はこうした文様が柄頭ばかりではなく、鞘尻にも施される文様であることを認識しなくてはならないだろう。

#### 4. 円頭大刀

秋山古墳群例【13】は、柄頭に亀甲繋文が施された円頭大刀である。現在この遺物の所在は不明であり、『埼玉県史』に掲載された写真から、八窓鍔や単脚足金物などを同一大刀の装具と仮定して検討せざるを得ない。鉄型の八窓鍔はその後の六窓鍔の出現期以降にも存続するので、それだけで時期を確定することはできない。単脚足金物は、6世紀後半から7世紀初頭を中心、大刀の佩用に使用されていたと考えられる（瀧瀬 1991b）。この単脚足金物は通常の形態であり、帶執孔はほぼ直上を向くが、これは新しい段階のものであるという指摘がある（新納 1987）。柄頭の亀甲繋鳳凰文は、橋本編年では第三段階（6世紀末）に相当する（橋本 1993）。これらのことから、現段階では【13】の年代をTK209型式期とするのがもっとも妥当と思われる。

鉄装の円頭大刀のなかには、長大な柄頭と刀身に特徴づけられる有窓鍔付円頭大刀の一群が存在

する。バルメット文様が象嵌された栃木県佐野市のトコチ山古墳例（佐野市郷土博物館 1986）や、嵌手刀と伴出した群馬県赤堀村の下触牛伏遺跡1号古墳例（徳江 他 1986）などはその好例といえる。これらは、おそらく鉄装円頭大刀でも最も新しい型式のひとつであり、現在のところは、その年代をTK209型式期～TK217型式期頃と考えている。【13】もその比較的長い柄頭や大きな鐔から、この型式に属する円頭大刀であったと考えられる（註3）。

また、鉄装の円頭大刀の型式としてはもう一つ、先述した頭椎大刀の場合と同様に、柄頭が有機質製の円頭大刀がある。三重県安濃町の平田14号墳から出土した資料によって、この柄の大刀の存在がはじめて明らかになった（伊藤 他 1987）。平田14号墳は一辺約12mの方墳で、木棺直葬の主部から推測される。柄頭は薄い樹皮に漆を塗ったもので、内部には植物質が充填されている。懸通孔は存在しない。柄頭の元部を錆金具で約し、柄には樹皮線を巻きつけている。鐔は倒卵形無窓鐔で、柄錆金具は存在しないようである。鞘は漆塗の木製鞘と推定される。鞘尻は丸尻の金具で、側面から目釘を用いて装着されている。錆金具・錆・鞘尻に銀象嵌を施している。錆は両面平と耳すべてに施される。共伴遺物には刀子・鉄鎌・須恵器・土器があり、須恵器はTK209型式に相当すると考えられる。

現在出土している柄頭の明らかでない象嵌装大刀、特に無窓鐔をもつ大刀のなかには、この平田14号墳例のように、柄頭が有機質製の円頭大刀が含まれている可能性があることを考慮にいれなくてはならない。

## 5. その他の象嵌装大刀

### (1) 無窓鐔をもつもの

【11b】広木大町9号墳例と【12】広木大町20号墳例は、無窓鐔にハート形文系統の象嵌を施すものである。ともに8単位であり、その配置はほぼ左右対称に割り付けられている。鐔の大きさや塞ぎのある鍔を有する点でもこの両例は共通するが、刀身は【11b】が不均等両開細茎、【12】は撫角片闊一文字尻細茎である。

橋本氏による象嵌鐔の編年（橋本 1993）では、旋毛状文の入ったハート形文をもつ【11b】は第三段階にあたり、【12】は第四段階に相当すると思われる。しかし【12】のハート形文のなかに一つだけ第三段階の特徴を有するものが見られ、全体の造りからみても、この両例に年代の差はあまり認められない。【11b】の鐔の耳には波状C字状文が施されている。【12】の耳の文様は欠落が多く判然としないが、C字状文もしくは波状C字状文と推定される。したがって、【11b】と【12】はともにTK209型式期の所産と考えられる。

なお、【12】は遊離した錆金具の存在から、もしこれが柄頭の錆金具であれば、有機質製の柄頭をもっていた可能性がある。ハート形文様を鐔に施す象嵌装大刀は、管見では全国でも19例とあまり多くはない（うち17例が無窓鐔）。千葉県成田市の瓢塚40号墳（安藤 1989 第12図4）や山梨県中道町の稻荷塚古墳（志木 1988）出土例は、柄頭に亀甲繋文を施す円頭大刀であり、この系統の文様が複数の型式の大刀に採用されていることがわかる。

【3】附川7号墳例と【16】塙田支群18号墳例は、無窓鐔の表（柄側）と裏（鞘側）にC字状文

を基本とした異なる文様が施されている。【3】は、表に内側の線から巻手状に延びるC字状文が左右対象に施されている。裏には区画線内に双葉文となったC字状文が左右対象に連続する。鐔の側面には裏と同じ双葉文が、塞ぎには表と同じ戦手状文があしらわれている。耳には象嵌がなく、年代推定の根拠に欠けるが、おそらくTK209型式期を遡るものではないと考えられる。

【16】は表に入れ子にした1列のC字状文が、裏には2列のC字状文が施される。裏の文様は橋本編年の第二段階（6世紀中～第Ⅳ四半期）に相当する（橋本 1993）が、鐔の表と同じモチーフの象嵌が鐔に施されているので、こちらのほうが主たる文様と考えられる。その年代は、耳のC字状文や不均等両闇の刀身から、TK209型式期のものと推定される。なお、【16】には遊離する縁金具が共伴する。この縁金具は扁平大形で、片面のみに象嵌が施されているため、縁金具というよりむしろ頭椎柄頭もしくは大形の円頭柄頭の切羽と考えたほうがよいのかもしれない。

### （2）有窓鐔をもつもの

【9】広木大町2号墳例は復元すると不均等な六窓鐔、もしくは五窓鐔になると考えられる。象嵌の単位は大きく、疎に施されている。これは一つの単位が大きくなれば、それだけ少ない施文で面積を埋めることができると省力化を表わすものと考えられ、文様の時期差を示す要素の一つとなる（註4）。また、六窓透でも透の配置が左右不対象になるものや、さらに少ない5つの透になる鐔は、有窓鐔でも後出と考えられる。これらのことから【9】はTK209型式期でも新しいものと推定される。

【14】小曾根神社古墳例は、鐔の平に渦文を充填している。同じ渦文を施す【15】と比較すると、【14】のほうが渦文一単位の巻きが多く、大きさや配列も整っており、八窓鐔であることを考慮に入れると、【15】よりも時期が遡る可能性がある。渦文の場合、正円に近い渦巻のほうが、「の」の字形になるものよりも相対的に古い文様と考えられ、「の」の字形でも、特に長く間延びするものは、施文の簡略化が進んだものととらえられよう。

【18】永明寺古墳例は、耳に施される文様と同じ直線C字文が、鐔の平にも充填される例である。永明寺古墳には、残存する部分や破片の観察から、少なくとも3振りの鉄刀が副葬されていたと考えられる。そのうち【18】は、片闇抉尻細茎をもち、全長が1m近くになる大振りな大刀であったと推定される。九窓透はあまり例がないが、透は左右対象に整然と割り付けられている。さらに、重厚でしっかりと造りの鐔であることから、その時期はTK43型式期もしくはMT85型式期に遡る可能性もある。群馬県高崎市岩鼻出土例（東京国立博物館編 1983）は【18】と同じモチーフの文様が六窓鐔に施されている例で、鍔と鍔元孔に象嵌を施す片闇の鉄刀と一具をなす。おそらく、鐔の両面と耳に象嵌を施す有窓鐔をもつ大刀の一部は、象嵌装大刀の一つの型式として6世紀後半から7世紀にかけて盛行していたと考えられる。この型式の大刀は、その鐔や茎の形成、その長さなどの諸要素が、耳象嵌装大刀の特徴と類似しており、同じ系統でより装飾性に富んだ象嵌装大刀の一群として位置づけることができる。なお、【18】にみられる紐巻の柄や木製の縁金具は、この種の大刀の持を認識できるものとして重要である。

### （3）その他

【17】将軍山古墳例は柄元もしくは鞘口の部分と推定される。柴田常恵氏の報文（柴田 1905）

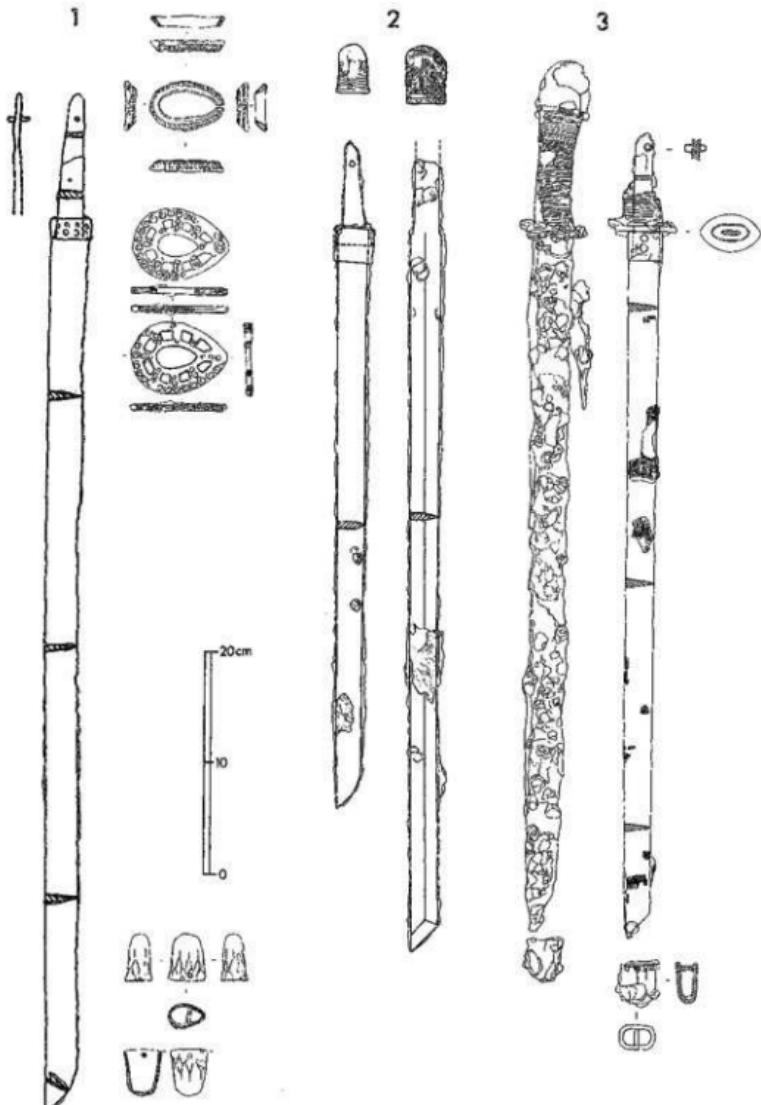
では「鐵質へ細き銀線を象眼と為し、蔓草を現はせしもの」とあり、一方の縁に無文の帶状飾金具がみられる。柄元とするならば、兵庫県川西市の勝福寺古墳例（木村 1929）に類似する柄をもつものと推定される。勝福寺古墳例は、鍔のない呑口式の円頭大刀と考えられ、柄元には竜文の象嵌が施されている（西山 1986）。この型式の円頭大刀は古式であり、TK43型式期のものと考えられる。将軍山古墳からは、銀線を巻いた柄部が2例出土している。【17】は、サイズがやや小さいが、おそらくこのどちらかに付属するものであろう。将軍山古墳の出土遺物は東京国立博物館、東京大学総合研究資料館、県立さきたま資料館などに分散して保管されているが、この遺物の所在は不明である。

#### 6. 鱗状文・羽状文を施す円頭状金具

【5】大道古墳例は、象嵌の大半が剥落しているが、羽状文が施されていたものと推定される。鱗状文および羽状文が施される円頭状金具について、それが離脱している場合は、柄頭なのか鞘尻なのにわからに決めがたいという問題が生じる。こうした金具は、管見の限りでは、【5】を含めて全国で24例確認されているが、確実にその区別がつくものは数例に過ぎない。柄頭の例としては、東京都大田区の多摩川台9号墳例（清水 1995 第12図6）がある。羽状文の施された柄頭が、目釘留式か嵌め込み式かは定かではないが、茎に挿入された状態を保って出土している。鞘尻の例は、羽状文では、先に紹介した沢の浦2号墳例もそれにあたると考えられるが、出土状況からみて間違いないのは、平田14号墳例である。また、円頭状金具ではないが、鱗状文が鞘尻に施された例として、石川県能登島町の須曾姫夷穴古墳（雌穴石室）例（富田 1992 第12図5）があげられる。出土状況は明らかでないが、象嵌円頭大刀装具がほぼ一式揃っており、形としては普通にみられる角尻の鞘尻に鱗状文が施されている。

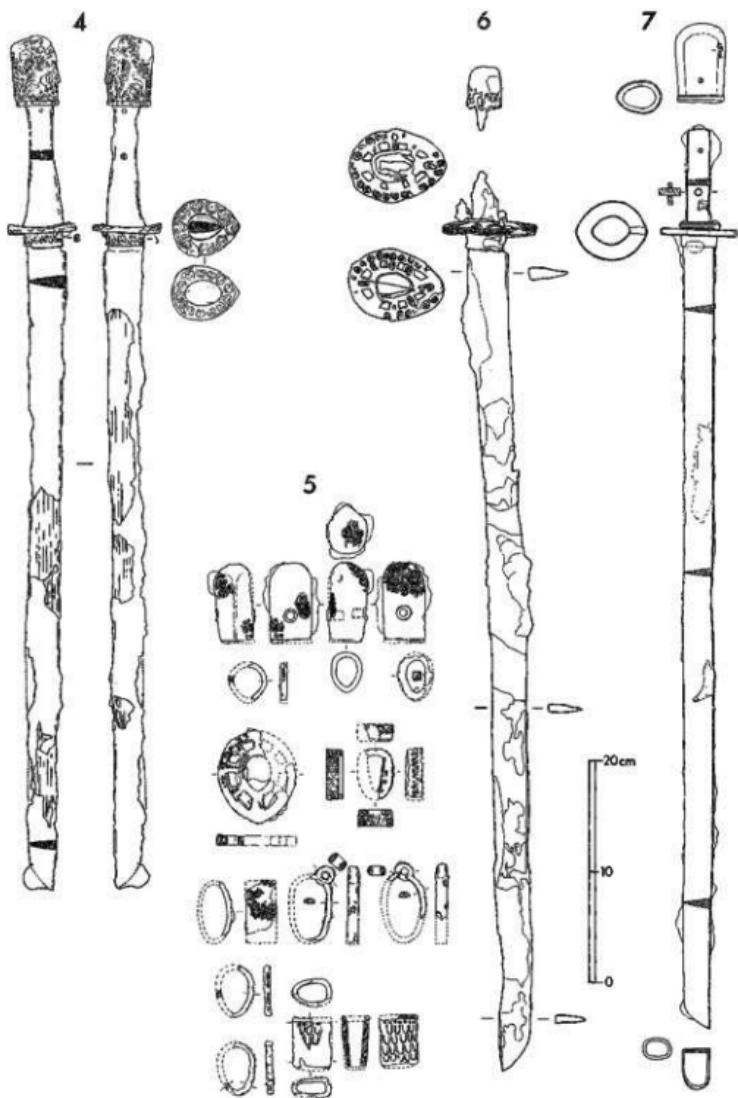
このように柄頭・鞘尻両方の出土例が存在することで、その判断はますます困難なものとなる。しかし筆者（瀧瀬）は、鱗状文や羽状文が施される円頭状金具は原則として鞘尻であるという立場にある（註5）。

その理由の一つとして、先に一部を紹介したが、象嵌装や鉄装の大刀のなかに有機質もしくは木製の柄頭をもつものが存在することがあげられる。機能的にみて佩用の際に損傷しやすい鞘尻に金具を使用する割合は、柄頭と比較すると多いのではないかと考えられる。もう一つの根拠はその文様の向きである。穴沢・馬目両氏は、鱗状文を施す大刀についての論考（穴沢・馬目 1979）のなかで、日本に多い単竜鳳環頭大刀に施される鱗状文は、柄頭から鞘尻に向かって重ねられ、積み下げられているもので、これらは竜の鱗、鳳の羽毛をあらわすものと指摘されている。さらに、日本・朝鮮出土の刀剣、馬具、装身具にみられる鱗状文は若干の例外を除いて羽毛・鱗をあらわす動物文であるとされている。環頭大刀について製作が開始された円頭大刀においても、鱗状文や羽状文はもともと動物文と認識されて施されたのではないだろうか。多摩川台9号墳例の羽状文は、ややその配置が崩れており、先端の直線は省略されている。おそらく羽状文のなかでも後出のもので、その本来の意味が失われてしまったものと考えられる（註6）。【5】に関しては、文様の大半が不明であり、その結論を出せないため、ここでは鞘尻もしくは円頭柄頭と報告しておく。



1. 兵庫 沢の浦 2号墳 2. 福岡 鬼塚 2号墳 3. 三重 平田14号墳

第11図 各地の象嵌装大刀(1) ( $S = 1/5$ )



4. 千葉 鹿猿40号墳 5. 石川 須曾姫穴古墳 6. 東京 多摩川台9号墳 7. 茨城 梅山古墳  
第12図 各地の象嵌装大刀(2) ( $S = 1/5$ )

橋本氏は茨城県大洋村の梶山古墳出土の資料について、亀甲繫鳳凰文が施された円頭柄頭と共に伴する鱗状文の金具を、別的小刀の柄頭とされている。その根拠として、①両者が同一の大刀の柄頭と鞘尻とするには、その大きさより不均合である。②モチーフが全く異なる。③鱗状文の金具に目釘が存在すること、の3点をあげている。また、両者が相接して発見されている出土状況もその裏づけとみなされているようである（橋本 1993）。

①に関しては第12図7に示した原報告（汀 他 1981）の実測図を参照されたい（報告の時点では象嵌の表出は実施されていない）。刀身には象嵌の施された鐸と鍔を有する鉄刀をあてている。亀甲繫文の柄頭口径は4.3cm、鱗状文のものは口径2.7cmである。確かに「不均合」といえないこともないが、問題はその「不均合」さが、これらを同一の大刀装具ではないと判断するに足る根拠となりうるかどうかであろう。その際には、現代人の感覚による「見た目」での評価は、極力避けなくてはならない。②のモチーフとは象嵌文様を指していると考えられるが、亀甲繫鳳凰文と鱗状文とは全く相容れない文様なのだろうか。亀甲繫鳳凰文は百濟武寧王陵例（金 他 1974）などにみると、単竜鳳環頭大刀の鞘口や柄頭元の筒金に施される場合があり、それが円頭大刀や頭椎大刀の柄頭の象嵌文様として採用されたと考えられる。鱗状文もまた単竜鳳環頭大刀に施された文様の一つであり、龍の鱗や鳳凰の羽を表現したものであるならば、柄頭に亀甲繫鳳凰文、鞘尻に鱗状文というその取り合わせは決して異様とはいえないのではないだろうか。③【15】や平田14号墳例などは、丸尻の鞘尻を側面から目釘で固定しており、こうした目釘留の方法は、柄頭に限ったことではないことがわかる。さらに、出土状況に関していえば、梶山古墳から出土した鉄刀のなかに、盤目釘をもつ鞘尻が、茎に銷付いて出土しているものがあり、必ずしも副葬されたそのままの状態を保ってはいないと考えられる。

## 7. 象嵌刀装具と金銅装大刀

【10】広木大町5号墳例の円頭状金具には、金銅製の資金物が付着している。象嵌はほとんど欠落しており、その文様は不明である。側面から目釘で留める方式のもので、鞘尻と推定される。広木大町5号墳からは、この金具と共に、金銅製の主頭柄頭（覆輪・平・鷲目・縁金具）、鐸、柄元縁金具および、鍔を有する刀身が出土している。出土状況は明らかでないが、これらは同一の大刀として認定できる資料である。主頭大刀の柄頭や柄元の縁金具と【10】の縁金具は同じ造りであり、鞘尻に相当するような金銅製の金具は出土していないことから、【10】がこの主頭大刀の鞘尻である可能性はきわめて高いと考えられる。

大阪府和泉市の道田池4号墳出土の金銅装主頭大刀の鞘尻は、鉄製丸尻の金具であり、植物文の象嵌が確認されている（註7）。また、福岡県行橋市竹並横穴G-121-1号横穴墓からは、象嵌装の鐵刀に金銅製の柄鞘装具を用いた主頭大刀が出土している（赤崎 他 1979）。一つの大刀の柄において、金銅と鉄（施象嵌）の異なる材質が確認される例は、極端に少なくはあるが、決して存在しない訳ではない。

## V 象嵌技法の分析

ここでは、保存処理に伴う象嵌表出作業において、象嵌の技法に関して得られた知見について、いくつかの項目について報告する。ここで報告する知見は、象嵌表出作業中に観察されたごく一部の情報であり、断片的である。製作技法を考える場合は、様々な情報を集積してその総体から判断するべきものであるが、ここでは、実資料に基づく基礎資料として提示しておきたい。

### 1. 文様構成と割り付けについて

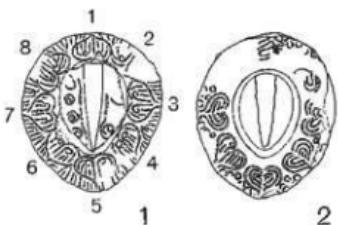
今回保存処理（象嵌表出）を行った資料は、欠失部が多いものが多く、全体の文様構成が分かるものは、【11b】の鐸及び【12】の鐸くらいである。【11b】、【12】ともハート形文を主体とし、同一古墳群から出土した鐸であるが、その文様構成には興味深い内容がある。ここでは、この2例の鐸について簡単に触れておくことにする。

【11b】の鐸（第13図1）は、表裏ともハート形文が8単位施され、その間を内から外へ向かう線によって充填されている。刀身側面において、このハート形文を鐘頂部から時計回りに1～8の番号を付してみて行くと、1はほぼ完全なハート形文であるが、2は剥落が多いものの1と接する文様外線は1に優先されて完全なハート形文にはならない。3は完全なハート形文であるが、4は5に優先されて5に接する文様外線が完全ではない。5と7は完全なハート形文であるが、双方に挟まれる6は文様外線の左右が完全ではなく、5と7に優先されている。8は剥落部があるものの、文様自体は完全なハート形文となろう。このことから、鐸刀身側の文様の割り付けは、上下と左右にほぼ対称となる4単位（1、3、5、7）をまず割り付け、その間を埋めるように4単位（2、4、6、8）を割り付けたものと思われる。しかし、ハート形文は必ずしも上下左右が正確な対称関係になく若干のズレが認められる。また、ハート形文の間を充填する線も本数や長さに規則性が特に認められるわけではない。これらのことから、左右対称の均整のとれた文様を意識したと言うよりは、隙間をなるべく埋めるという意識が強かったものと思われる。

【12】の鐸（第13図2）は、表裏にやはりハート形文が8単位めぐる。剥落部分が多く、一単位ごと欠失する部分もある。【12】の文様は、外縁のハート形文にならってその内側にも2対のハート形文が施されて一単位となる。しかし、柄側の面には、【11b】のハート形文を若干変形したようなハート形文が一単位だけ存在する。このことがなにを意味するものかは不明であるが、興味深い事例である。象嵌の前には、おそらく下図を描くと思われるから、下図の段階から意識して施されたものと考えざるを得ない。

### 2. 鑄溝の形状について

古墳時代の象嵌技法は、線象嵌技法に属する。



第13図 鐸の文様構成図 (S = 1/2)

すなわち、鉄地に鑿で線刻し、そこへ異種の金銀線を嵌め込み文様や文字を表す技法である。古墳時代の象嵌資料において、鑿溝の断面形状は、現代の線象嵌にみられる形状とは異なり、単純なV字あるいはU字状をしていることが知られている。象嵌遺物の鑿溝の形状は、象嵌線の剥離、剥落部や鉄地の銷瘤による象嵌線の分断部分などを実体顕微鏡で観察することで確認できる。ただし、このような部分は象嵌表出作業中に偶然発見されることがほとんどであるから、処理したすべての資料について得られる知見ではない。

今回表出を行った資料で鑿溝の形状が確認できた資料は、【7】の鍔、【9】の鐸、【10】の鞆尻、【12】の縁金具及び鐸、【15】の縁金具、鐸、鞆尻である（第4表）。また、【3】及び【8】については、既に岩本克昌氏によって報告がなされており（岩本 1981、1986）、今回はその再確認を行った。

鑿溝の断面形状はV字状を呈するものとU字状を呈するものとがある（第4表）。鑿溝がV字状を呈する部分が確認できた資料は、【7】、【9】、【10】、【12】である。【15】は柄頭縁金具でU字が一ヶ所確認されたが、その他の資料はV字が基本のようである。V字状を呈するものには、溝底部がやや丸みを持つものも多いが、基本的にはV字と捉えて問題はないと思われる。しかし、【15】の柄頭縁金具とそれ意外の同一古墳から出土した資料（鐸、鞆尻）の鑿溝の形状とは底部の状態がかなり異なる（写真56・57）。腐食の度合や確認し得た部位の箇所数も考慮に入れるべきであるが、鑿の刃先形状の相違が推定可能な例である。

鑿溝の断面形状がV字ないしU字状として報告されている例は、埼玉県稻荷山古墳出土鉄剣の金象嵌（田中・中野 1982）や千葉県稻荷台1号墳出土「王賜」銘鉄剣の銀象嵌（永嶋 1993）、江田船山古墳出土銀象嵌銘大刀の銀象嵌（青木 1993）などがある。これらは、各象嵌文字の観察記述から「V字」あるいは溝底に丸みを持った「V字」と捉えてよいと思われるが、もし同一資料中で「V字」と「U字」とに明らかな相違が認められる場合には、使用した鑿の刃先形状やその使い分けに係る重要な問題となる可能性をもつ。今後「V字」と「U字」の判断基準をどう設けるかが課題となろう。

鑿彫りを行った時の単位（打數）の痕跡は、銀線が鉄地から剥離し浮き上がって、銀線の裏側が観察される部分から銀線に残る痕跡によって間接的に判断できる。また、X線透過写真を拡大して観察することによって、銀線と鉄地の境界部からある程度判断可能である。

資料【12】の鐸には銀線の浮き上がりがある。この部分は、銀線が鉄地から剥離し、めくれ上がりっているため銀線裏面がよく観察できる。この部分では、波打ったような状況が見て取れ、その間隔は0.8mm～1.0mmである（写真58・59）。溝底部あるいは側部の鑿痕の間接的な痕跡と考えられる。資料【18】の鍔のX線写真（画像処理：浜松ホトニクス SUPER EYE C 2847使用）では、波状文の曲線部内縁がなだらかな曲線にならず角を有する（写真60）。角の間隔は1mm前後（X線写真上で計測）である。これは溝の上場に残る鑿彫り単位の痕跡として捉えることが可能と思われる。

その他にもX線写真を拡大して詳細にみて行けば、このような情報がかなり得られると思われる。この方法は、象嵌表出後の状態とは異なり、象嵌線のほぼオリジナルな状況を保っていると考えられ、表出作業による銀線と鉄地の境界部の不鮮明化などをカバーできる利点がある。

第4表 象嵌細部観察表

資料No.	出土古墳	部位	材質	銀線の幅[mm]	輪溝の形状	輪溝の深さ[mm]	知見
【3】	附川7号墳	鍔	銀	0.5~0.7	V字		銀線交差部あり
【5】	大道古墳	鞘尻(柄頭)					木突出か
【7】	金崎古墳群	鍔	銀	0.4			
		鍔	銀	0.4~0.5	V字		
【8】	塙本山137号墳	柄頭	銀	0.4~0.8			溝の形状明瞭
		鈎頭鍍金具	銀	0.4~0.5			
		鍍金具	銀	0.4~0.5			
		鍔	銀	0.4~0.8			
		鍔	銀	0.4~0.5			
【9】	広木大町2号墳	鍔	銀	0.3~0.6	V字		銀線に乱れ
【10】	広木大町5号墳	鞘尻	銀	0.4~0.6	V字	0.2	銀線中央に筋(鑿痕?)
【11a】	広木大町9号墳	鍔	銀	0.6~0.9			銀線中央に筋(鑿痕?)
【11b】	広木大町9号墳	鍔	銀	0.2~0.6			銀線中央に筋(鑿痕?)
		鍔	銀	0.2~0.6			
【12】	広木大町20号墳	鍍金具	銀	0.5~0.6	V字	0.2	銀線断面が2層分離
		鍔	銀	0.6	V字	0.2	銀線裏面に鑿痕残る
		鍔	銀	0.6			銀線に板、斜め筋
【15】	三ヶ尻林4号墳	鈎頭鍍金具	銀	0.5	U字	0.2	銀線表面に研磨痕
		鍍金具	銀	0.5			銀線中央に筋(鑿痕?)
		鍔	銀	0.5~0.9	V字	0.2	銀線中央に筋(鑿痕?)
		鍔	銀	0.5~0.7			銀線中央に筋(鑿痕?)
【18】	永明寺古墳	鍔	銀	0.5	V字		銀線中央に筋(鑿痕?)
		鍔	銀	0.4			銀線に斜め筋(X線写真)
		鍔	銀	0.4			鑿痕?(X線写真)

輪溝の上幅は、銀線の幅を表面から計測して判断した(第4表)。いずれの資料についてもその幅は厳密には一定しているわけではない。今回象嵌を表出した資料では、銀線の先端部(彫り始めから彫り終わり)は細く、中央部では概ね0.4mm~0.9mmである。そのうち、【11a】と【15】の鍔に一部0.9mmとかなり太い部分がみられる。いずれも鍔耳部のC字状文である。輪溝は、上幅が広ければそれだけ溝も深いと考えがちであるが、この資料に関しては深く彫るにはやや難しい部分であり、小さな曲線部でもある。したがって、使用した銀線がほぼ一定した容積を持つとすれば、むしろ溝の深さは浅く、そのぶん幅が広くなるのではないかと思われる(鑿の打ち込み角度も関係する可能性がある)。

輪溝の深さは、【10】の鞘尻及び【12】の鍍金具と鍔、【15】の鍔で計測でき、いずれの資料も0.2mm前後である。

### 3. 銀線について

今回表出した象嵌はすべて銀である(色調から判断)。銀線自体の調査は、表出作業中の実体顕微鏡観察による平面あるいは断面の観察、またX線透過写真を詳細に観察することで行った。

象嵌に用いられる金属線の製作方法は、金線においては、鉄板に小穴を開けた引抜を用いて細い金線を作る方法(田中・中野 1982)や銀線においては、銀の細棒を折り返しながら繰り返し叩いて細く延ばして行く方法(西山 1992)などが推定されている。また、沖ノ島7号遺跡出土鍔金具

の金象嵌のように、短冊状の金をコヨリを撫るようにして作った金線を象嵌している例も報告されている（青木 1989）。

今回表出を行った銀線は、腐食が著しいものが多く、表面に凹凸があるものや銀線と鉄地の境界がはっきりしないものなどがある。特に資料【9】では、かなり銀線が乱れており、一見撫ったようを見える部分もある（写真62）。

【12】の縁には、銀線が鉄地から若干浮き上がった部分があり、銀線には継あるいは斜めに入る筋が観察される（写真63）。斜めに入る筋は、【9】及び【18】のX線写真（画像処理：前掲）をみても観察される（写真64・65）。

銀線に残る斜めや継の筋は、腐食によって2次的に生じたものとも考えられるが、銀線のつなぎ目や銀線打ち込み時の撫れ、あるいは撫りをある程度加えた銀線を用いたことも考える余地があるものと思われる。

このような銀線に残存する僅かな痕跡を、表出後の表面的な観察に加え銀線に焦点をあてたX線透過撮影によって更に多くの情報を抽出することが必要であると思われる。

#### 4. 銀線の打ち込みについて

銀象嵌は、鉄地の線刻部に銀線を嵌め込むわけであるから、嵌め込む時には型を用いて打ち込んでいることは容易に想像がつく。しかし、銀線嵌入後に表面の研磨が加えられると、その痕跡は容易には確認できない。

現代の伝統技法では、この打ち込みに、先の平らな型、多少丸い型、尖った型が用いられ（香取・井尾・井伏 1991）、特に統一した型を使用しているわけではないようである。ただ、型の打ち込む方向は、線の延びる方向に対して型の刃先長辺は直行する方向のようである。

今回表出作業を実施した資料の銀線表面をみると、銀線のほぼ中央が、線の延びる方向に対して平行方向に筋状の陥没が認められるものがある。特に資料【10】の鞘尻では、豊溝の形状に倣うかのようにV字状に陥没している（写真66）。この他にも銀線中央のこのような筋状の陥没は、資料【9】、【11a】、【15】の縁金具、鐸、鍔、鞘尻にそれぞれ認められる。また、【9】及び【10】では、その陥没の深さが一定しておらず、深い部分と浅い部分が存在する（写真66・68）。これらの筋状の陥没は、鉄地あるいは銀線自体の腐食による銀線表面の乱れの可能性も考えられるが、銀線打ち込み時の撫痕であるとすれば、陥没に深い部分と浅い部分の存在は、型の打ち込み単位として理解できる。そうなると、型の刃先長辺の方向は銀線が延びる方向に対して平行であり、現代の伝統技法で行われる打ち込み法とは異なることになる。

#### 5. 仕上げ研磨について

象嵌を鉄地に施した後に、象嵌表面を平滑に調整するための研磨がなされると考えられる。古墳時代の資料では、稻荷山古墳の金象嵌例（西山 1982）や稻荷台1号墳の銀象嵌例（永嶋 1993）で明瞭に確認されている。

今回表出を行った資料では、唯一資料【15】の柄頭縁金具にのみ確認された（写真69）。ただし、

これは表出作業において上層の鉄錆がきれいに銀と鉄錆の境界ではがれたことによる結果である。その他の資料は、エアーブラシによる錆除去を行っているため、その弊害と思われる。表出方法を検討する必要があろう。

## VI まとめ

### 1. 象嵌装大刀の型式分類について

古墳時代における拵をもつ大刀は、高橋健自氏の功績（高橋 1931）以来、その柄頭の形状から分類・研究されてきた。柄頭にとらわれず巨視的に飾り大刀全体をとらえようとする町田 章氏の論考（町田 1987）もあるが、今回の小論では、柄頭による従来の型式分類をふまえて記述を行ってきた。しかし、すでに明らかとなったとおり、象嵌装大刀の中にはその範疇に入らない（現状では判断できない）ものが数多く存在している。

そこで、象嵌が施される大刀を対象に、今回得られた知見と従来の研究を基に整理して、次のように分類を行った。その分類基準や類例等については、一部はIV章でとりあげたが、そのすべてを詳述することは、紙面も限られ、小論の主旨にも逸脱するため、県内資料以外のものは代表例を併記するにとどめておく。今後の研究に資するための試論として展示するものである。

A 環頭大刀	1 象嵌装素環頭大刀	熊本県菊水町江田船山古墳例（本村 1990）
	2 宮山型環頭大刀	兵庫県姫路市宮山古墳例（町田 1976）
	3 象嵌装三葉環頭大刀	福岡県宗像市久戸 9号墳例（横田 1985）
	4 象嵌装单竜鳳環頭大刀	【6】
B 円頭大刀	1 象嵌装円頭大刀	【13】
	2 象嵌装木芯円頭大刀	三重県安濃町平出14号墳例（【12】）
C 椎頭大刀	1 象嵌装頭椎大刀	【8】
	2 象嵌装木芯頭椎大刀	【15】（【16】）
D 圭頭大刀	象嵌装圭頭大刀	福岡県広川町鬼塚 2号墳例（川述 他 1986）
E 方頭大刀	象嵌装方頭大刀	奈良県平群町梨本 2号墳例（寺沢 他 1986）
F 楔形柄頭大刀	象嵌装楔形柄頭大刀	群馬県高崎市綿貫観音山古墳例
G (柄頭不明)	1 象嵌装有窓鐔付き大刀	【18】（【9】【14】）
	2 象嵌装無窓鐔付き大刀	【3】【11b】
	3 耳象嵌装大刀	【1】【4】【7】【11a】第3表参照

\*出土例のカッコ内は推定。

このうち、G 3 はすでに細分を試みた。A 4・B・C・E・G 1・G 2 も、さらに細かい型式を設定できると考えられる。特に円頭大刀に関しては、象嵌の施されない鉄装のものを含めたうえで検討を行う必要があろう。

## 2. 象嵌装大刀の性格について

いわゆる飾り大刀の考古学的解釈として、これらの大刀は畿内政権からの下賜品であり、実用武器というよりも威信財としての役割を果たしたものという説が有力である。島根県出雲市の岡田山1号墳から出土した象嵌装円頭大刀の刀身には、「額田部臣」という文字が含まれる銘文が象嵌されている。その内容は、この大刀が出雲意宇の豪族に賜与された動機が記されていたものと考えられている（町田 1987）。また、「戊辰年五月（中）」の銅象嵌が発見された兵庫県八鹿町の箕谷2号墳出土の大刀は、柄頭の不明な金銅装大刀であるが、「但馬最大の政治権力を持つ大蔵古墳群を築いた豪族に対して、大和政権が「官人化政策」の第1歩として賜与したもの」とされている（谷本 他 1987）。環頭大刀や頭椎、円頭、圭頭大刀に属さない象嵌装大刀（もしかしたらそのいずれかに属していたのかも知れないが）も、同一型式の大刀の存在や、ある種の文様の規格性から、基本的にはそれと同様の意義を有していたものと推定される。

東国における6世紀後半以降の飾り大刀の増加と、その形の多様化は、大前方後円墳から小円墳や横穴墓の被葬者に至るまでより幅広い階層に対する、畿内政権の頻繁な働きかけの結果と考えられる。象嵌装大刀を含むそれぞれの型式の大刀が、従来内在していた性格に基づいて、それぞれ異なった動機によって下賜され、ランクの違いが生じていたという解釈も可能である。

象嵌を施した大刀は武藏国では24の古墳から出土している。これらは6世紀第3四半期頃に出現し、西暦600年前後に最もその副葬が盛んとなる（註8）。出現当初は、古墳群の盟主的存在である前方後円墳が中心で、他の飾り大刀と共に出土する例が多いが、次第に古墳群のなかでも比較的有力な規模を有する円墳や、さらにはその構成員である小規模円墳に個々に副葬されるようになる。これは東国において一般的な傾向であるが、一つ注目しなくてはならないのは、広木大町古墳群における象嵌装大刀の出土状況である。

美里町に所在する広木大町古墳群からは、今回の調査で5点の象嵌遺物が発見された。一つの古墳群としては、その量は特筆すべきものであろう。象嵌装大刀は、中心となる前方後円墳（9号墳）と周辺の数基の円墳から出土しており、新旧型式の異なる大刀が存在するため、継続して副葬されていたことがわかる。このことは、広木大町古墳群を形成した集団が、畿内政権との関係をある程度の期間にわたって保持しており、象嵌装大刀を拝領する資格を有していたことを意味している。そしてこのような資格はその場限りの御褒美ではなく、例えばその地域の統治権といったような、どちらかというと畿内政権から承認を受ける必要のある権利であった可能性が強いのではないだろうか。また、円頭大刀や頭椎大刀よりはランクが低いと考えられる圭頭大刀が（象嵌鞘尻をもつかどうかは別にして）、この古墳群から出土していることも興味深い事実といえよう。

古墳群のなかで複数の象嵌装大刀が副葬される状況は、他県では福島県いわき市の八幡横穴墓群（いわき市 1976）や栃木県小山市の飯塚古墳群（秋山 1985）などにみられる。象嵌装大刀の出土状況としては、決して一般的なものではなく、むしろ特異と考えたほうがよいのかもしれない。しかし、簡素な柄をもつ鉄装や銅装の大刀を除くと、他の飾り大刀と称される拝領大刀の古墳群からの出土状況には、このような顕著な例をあまりみることができない（註9）。これは象嵌装大刀の特徴の一つとして指摘することができる。

### 3. 象嵌遺物の保存処理と細部情報の抽出について

出土後の象嵌遺物の劣化状態は、象嵌線そのものが単独で脱落している例より鉄地の層状剥落に伴う鉄地ごとの脱落の方が日につく。このような劣化状態は、象嵌遺物に限らず鉄製遺物では普通に見られる現象である。しかし、象嵌を有する場合には、失う情報量は非常に多い。したがって、積極的な象嵌確認調査と保存処理が必要となる。

象嵌遺物の保存処理に伴う象嵌の表出は、文様構成の正確な把握、細部情報の抽出、視覚資料としての社会還元などに有効な手段である。しかし、その一方では、表出作業に伴う細部情報の損失が危惧されている。したがって、細部情報の損失を最小限に抑える表出方法と最大限の情報を抽出する調査方法の開発が望まれる。

今回行った表出方法は、従来から行われているグラインダーやエアーブラシを多用する方法であるが、この方法が持つ欠点は、鉄鏽中の象嵌の深さが一定でないために起こるグラインダーによる象嵌線の損傷やエアーブラシによる象嵌線表面情報の損失などがあげられる。特にエアーブラシを用いると、象嵌線表面に残る研磨痕などの微細な情報は失われることが多い。

このような従来の方法の改良策として、プラズマによる象嵌の表出方法（青木 1993）が実施段階に入っている。この方法は、プラズマ処理によって還元された表層の鏽が、下層の緻密な鏽及び異種金属（象嵌線）から剝がれやすくなり、メスなどで比較的簡単に表層鏽を除去できるというものである。ただ、象嵌線自体の劣化が著しいものや象嵌上層の鏽よりもむしろ鉄地の腐食の方が進んで脆弱となっているものも存在するため、劣化状態に即した表出法の判断基準（プラズマの適用範囲）を明確にする必要がある。

古墳時代の象嵌は、線象嵌技法によるものであり、技法的には比較的単純であるかのように見えるが、彫溝の形状が示すように近世からの線象嵌技法とは異なることが知られ、現代の伝統的な象嵌技法の尺度で古墳時代の象嵌技法をみるとやや危険が伴うと思われる。現段階では、実資料の詳細な観察に某づく情報の蓄積が最も必要である。そのためには、X線透過検査においても、象嵌の有無や文様等の位置の把握のみに止まらず、象嵌線に残る僅かな痕跡や象嵌線と鉄地の境界部の状況を詳細に観察し、より多くの技法的な情報を抽出することが必要である。

### 4. 刀装具における象嵌遺物の割合について

鉄製の円頭柄頭もしくは丸尻の鞘尻、すなわち円頭状刀装具は、1996年4月現在までの瀧瀬のデータによると178の出土例がある（それらがセット関係と考えられる場合は1とカウントしている）。そのうち、象嵌が発見されたものは91点で、全体の約51%にあたる。ただし、残りの87点には、X線調査を実施していない遺物が含まれているため、象嵌が施されている割合はさらに増加する可能性がある。

鍔に関しては、ひとつの基準として東京国立博物館に所蔵されている古墳遺物のうち、X線撮影が実施された群馬・埼玉・東京・神奈川・千葉から出土した資料（東京国立博物館編 1983および1986）を対象とした数値を紹介しておこう。鍔は全部で84点存在し、うち象嵌の施されたものが23点であった。その割合はおよそ27%とさほど高くはない。ただし、全体のうち無窓鍔は43点、有窓

鑑は41点で、そのうち象嵌の無窓鑑は4点と非常に率が低い（約9%）のに対し、有窓鑑では19点から象嵌がみつかっており、その割合は46%とほぼ半分を占めている。

これらのデータから、鉄製円頭状刀装具は5割以上、鉄製有窓鑑も2点に1点弱の割合で象嵌が発見される可能性があることになる。鉄製刀装具や鑑付きの鉄刀が出土した時には、つねに象嵌の存在を念頭におく必要があるだろう。状態の良好なものは、肉眼で注意深く観察すると、部分的にでも象嵌を確認できることがある。欠損している時にはその割れ口を観察するのも一つの方法である。また、銀は空気につれて酸化すると黒く変色するので、鑑全体が重く黒ずんでいる場合には、ほぼ確実に象嵌が存在すると考えられる。

この論文は、埼玉県埋蔵文化財調査事業団の平成6年度研究助成による共同研究「埼玉県内出土象嵌遺物の研究」の成果である。執筆はI、II、IV、VI-1・2・4を瀧瀬が、III、V、VI-3を野中が担当した。文責は各執筆者にある。

県内の資料を調査するには、資料の所有者である埼玉県の各機関、および各市町の教育委員会の御理解と御承諾なしに実施することはとうてい不可能であった。今回ここにその成果を発表するにあたっても、その掲載を快く許可していただいた。また、この小論をまとめるに際し、多くの方々に御助言、御教示をいただいた。末筆ではありますが、ここに記して深く感謝の意を表します。

江南町教育委員会・埼玉県立博物館・埼玉県立埋蔵文化財センター・埼玉県立歴史資料館・東京大学総合研究資料館・滑川町教育委員会・東松山市教育委員会・美里町教育委員会・皆野町教育委員会・永明寺

青木繁夫・赤澤 威・穴沢咏光・新井 端・石岡憲雄・市川 修・犬竹 和・岩瀬 譲・岩田 明広・岩本克昌・江原昌俊・岡本幸男・小川良祐・菊池伸之・木村恵美子・木村俊彦・栗原文藏・小久保徹・齊藤芳子・境 宏・榎原和子・塩野 博・清水久男・高橋昌子・辰巳和弘・谷井 彪・利根川章彦・西山要一・鎌川金也・堀 美子・松崎元樹・丸山陽一・水村孝行・宮小路賀宏・宮代栄一・森 浩一・森田安彦・横田義章  
(五十音順、敬称略)

## 註

- (1) 本資料は岩槻市教育委員会小林朝教氏の御厚意により、現在(平成8年4月)、調査を実施している。氏の御了解を得た上で、その成果は稿を改めて発表したい。
- (2) 櫛本氏の年代観では第三段階に6世紀末が、第四段階に6世紀後葉の年代が提示されている。象嵌鑑の編年図では、第四段階に6世紀末という表示がある。
- (3) 鉄製円頭大刀全体の分類は、今後の課題と考えている。
- (4) この傾向は第四段階でも新しいものとされている(櫛本 1993)。
- (5) 長野県須坂市の本郷大塚古墳例(泉森 他 1992)では、羽伏文を施す円頭状具を象嵌装大刀の柄頭とみなし、鞘尾には象嵌のない角頭の金具が切先に挿入されたかたちで作図されている。出土状況などその組み合わせの根拠は示されていない。少なくとも、その状態で出土したものではないようである。
- (6) 多摩川台9号墳例の鑑は八窓鑑ではあるが、平に施される象嵌文様は、やや間延びした「の」の字状の溝文で、耳の文様は交差単円文である。ともに、後出のものと考えられる。
- (7) 同志社大学蔵・森 浩一・辰巳和弘両氏の御厚意により査定する機会を得た。

- (8) 県内の個々の資料の年代に関してはかつて発表した見解（瀧瀬 1991a）と若干異なる部分もあるが、今回それを訂正するものである。
- (9) 北海道・東北地方における、いわゆる末期古墳を除く。

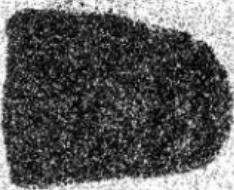
#### 参考・引用文献

- 青木繁夫 1989 「古墳時代金銅製品の保存について」『装飾金工品の保存における問題について（昭和63年度文化財保存修復研究協議会記録）』 東京国立文化財研究所 p27~33
- 青木繁夫・犬竹 和 1993a 「象嵌のクリーニングと研ぎ出し」[江田船山古墳出土 国宝銀象嵌大刀] 吉川弘文館 p37~39
- 青木繁夫・犬竹 和 1993b 「プラズマによる象嵌遺物の保存処理について」[平井地区1号墳] 藤岡市教育委員会 p46~51
- 青木繁夫・旗月幹夫 1993 「保存ケース」[江田船山古墳出土 国宝銀象嵌大刀] 吉川弘文館 p39~41
- 赤崎敏男 他 1979 「竹並跡」 竹並遺跡調査会
- 秋山謙雄 1985 「市内古墳出土鉄製品の科学的分析—X線照射による象嵌の発見—」[小山市史研究] 第7号 小山市史編纂室 p118~121
- 厚木市 1993 「厚木市史」古代資料編(1)
- 網干善哉 1986 「関西大学蔵銀象嵌把頭について—角甲鑄文の類例と考察—」[関西大学考古学等資料室紀要] 第3号 p1~17
- 穴沢啄光・馬目順一 1978 「東北地方出土の環頭大刀の諸問題」[福島考古] 第19号 福島考古学会 p63~82
- 穴沢啄光・馬目順一 1979 「日本・朝鮮における鱗状紋装飾の大刀」[物質文化] 33 物質文化研究会 p1~25
- 安藤鴻基 1989 「千葉県成田市瓢塚40号墳の資料吟味」[房総風土記の丘年報] 13 平成元年度 p150~162
- 泉森 咲 他 1992 「本郷大塚古墳」 須坂市教育委員会
- 市機重喜 他 1987 「沢の浦古墳群」 兵庫県文化財調査報告書第48冊
- 伊藤英児 他 1987 「平田古墳群」 安曇町遺跡調査会
- いわき市 1976 「いわき市史」第8巻 原始・古代・中世資料
- 岩崎卓也 他 1986 「武者塚古墳」 新治村教育委員会
- 岩槻市役所 1983 「岩槻市史」 考古資料編
- 岩中淳之 他 1982 「南山古墳発掘調査報告」 伊勢市文化財調査報告1
- 岩本克昌 1981 「出土鉄製品の保存修復処置について」[埼玉県立歴史資料館研究紀要] 第3号 p123~136
- 岩本克昌 1986 「塚本山古墳群出土鉄製品の保存処置」[埼玉県立歴史資料館研究紀要] 第8号 p157~168
- 宇垣匡雅 1995 「川戸古墳群発掘調査報告書」 大原町教育委員会
- 白杵 默 1984a 「古墳時代の鐵刀について」[日本古代文化研究] 刨刊号 古墳文化研究会 p49~70
- 白杵 默 1984b 「縄本孔を持つ鐵刀について」[考古学研究] 第31卷第2号 考古学研究会 p97~106
- 梅沢重昭 1990 「観音山古墳の発掘調査」[彦ノ木古墳と東国古墳文化] 群馬県立歴史博物館 p58~80
- 江本義理 1982 「展示ケース、展示・収蔵棟について」[埼玉縮荷山古墳 辛亥銘鉄劍修理報告書] 埼玉県教育委員会 p24~27
- 大宮市 1986 「大宮市史」第1巻
- 岡村 渉 他 1992 「平城遺跡・平城古墳群」 静岡市埋蔵文化財調査報告27
- 小川貴司 他 1988 「井上コレクション弥生・古墳時代資料図録」
- 小倉 博・三門 勝 1982 「北緯の原始古代」 成田山書光館図録第3集
- 片岡貴英 1994 「神宮谷古墳群発掘調査概要」[京都府遺跡調査概報] 第56冊 京都府教育委員会
- 葛原克人 1993 「平瀬古墳群」「山陽自動車道建設に伴う発掘調査7」 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告83
- 香取正彦・井戸敏雄・井伏圭介 1991 「金工の伝統技法」 理工学社 4-30~4-35

- 金井塚良一 1971 『附川古墳群』 東松山市文化財調査報告第8集
- 川添昭人 他 1986 『鬼塚古墳群』 広川町文化財調査報告書第5集
- 神林淳雄 1940 「鉄装大刀と鉄製柄頭」『考古学雑誌』第30巻第3号 日本考古学会 p23~35
- 谷多坐介 1993 『石川阿ら地遺跡』 印旛郡文化財センター発掘調査報告書第66集
- 金 元龍 他 1974 『武寧王墓』 学生社
- 木村俊彦 他 1986 『寺前古墳群 大道古墳』 津川町文化財調査報告第3集
- 木村次雄 1929 「折津の跡鏡出土の古墳」『考古学雑誌』第19巻第11号 日本考古学会 p20~27
- 熊谷市 1963 『熊谷市史』 前編
- 江南町 1995 『江南町史』 資料編1 考古
- 小林三郎・熊野正也 1976 『法王塚古墳』 市立市川博物館研究調査報告第3回
- 小柳和宏 他 1986 『ガランドヤ古墳群』 日田市教育委員会
- 栗原文蔵・塙野 誠 1969 「埼玉県羽生市水明寺古墳について」『上代文化』第38輯 国学院大学考古学会 p56~54
- 小久保豊 他 1983 「三ヶ尻天王・三ヶ尻林(1)」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第23集
- 河野國雄 1935 「徳川末期の古墳発掘報告」『考古学』第6巻第5号 東京考古学会 p212~213
- 黒崎 直 他 1976 『西隆寺発掘調査報告書』 西隆寺跡調査委員会
- 後藤守一 1936 「頭椎大刀について」『考古学雑誌』第26巻第8・12号 日本考古学会 p6~32・p9~26
- 胸井正明 1993 『上フジ遺跡III・三山古墳』 勝大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第80号
- 埼玉県 1951 『埼玉県史』 第1巻 先史原史時代
- 埼玉県立さきたま資料館 1994 『埼玉県古墳群詳細分布調査報告書』 埼玉県教育委員会
- 斎藤 忠・柳田敏司 他 1980 『埼玉福荷山古墳』 埼玉県教育委員会
- 佐野市郷土博物館 1986 『よみがえる古墳—佐野とその周辺—』
- 滋賀県埋蔵文化財センター 1993 「古墳出土の銅から銀象嵌を発見 山東町すも原古墳」『滋賀埋文ニュース』第156号
- 志木 健 1988 『稻荷塚古墳』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第38集
- 柴田常吉 1905 「武藏北埼玉郡埼玉村利根原塚」『東京人類学会雑誌』231号 東京人類学会 p375~379
- 清水久男 1995 「多摩川台古墳群第9号出土の銀象嵌大刀」「大田区立郷土博物館紀要」第5号 p189~202
- 未本信策・平良泰久 1972 「中坂古墳群発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報(1972)』 京都府教育委員会
- 皆谷治之 他 1990 「秋山古墳群—庄中原古墳・諏訪山古墳の競争—」 児玉町資料調査報告古代第2集
- 皆谷治之・笠森健一 1975 『広木大町古墳群発掘調査概報』 美里村教育委員会
- 高橋健白 1931 『鏡と劍と玉』 富山房
- 高橋 守・桜川儀一 1991 『安造田東3号墳発掘調査報告書』 濱邊町文化財保護協会
- 龍船芳之 1991 a 「埼玉県の拾付大刀」『研究紀要』第8号 勝浦埼玉県埋蔵文化財調査事業団 p101~126
- 龍船芳之 1991 b 「大刀の佩用について」『埼玉考古学論集』 勝浦埼玉県埋蔵文化財調査事業団 p739~778
- 多気町教育委員会 1992 a 『多気町遺跡ニュース』 1
- 多気町教育委員会 1992 b 「石塚谷古墳の大刀象嵌について」(記者発表資料)
- 田中 勇・中野政樹 1982 「象嵌について」『埼玉福荷山古墳 辛亥銘鉄劍修理報告書』 埼玉県教育委員会 p28~29
- 田中新史 1988 「八窓鐸」「井上コレクション弥生・古墳時代資料図録」 小川貴司 p137
- 谷本 遼 他 1987 『武谷古墳群』 八施町文化財調査報告書第6集
- 坪田貞一 1995 「高安古墳群大石古墳」 勝八尾市文化財調査研究会報告44
- 寺沢 黒 他 1986 「鶴木東遺跡発掘調査報告書」『奈良県遺跡調査報告(第一分冊)1984年度』 奈良県立橿原考古学研究所
- 東京国立博物館編 1983 『東京国立博物館収蔵目録』 古墳遺物篇(関東II)

- 東京国立博物館編 1986 「東京国立博物館図版目録」古墳遺物篇（関東III）
- 徳江秀夫 他 1986 「下触牛伏跡遺」 細群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 富田和良夫 1992 「須曾蛭穴古墳」 能登島町教育委員会
- 永嶋正春 1993 「『王鷦』銅鉄劍のX線的調査と銘文の表出」『国立歴史民俗博物館研究報告』第50集
- 新納 泉 1984 「関東地方における前方後円墳の終末年代」『日本古代文化研究』創刊号 古墳文化研究会 p41~47
- 新納 泉 1987 「戊辰年銘大刀と装飾付大刀の編年」『考古学研究』第34卷第3号 考古学研究会 p47~54
- 西山要一 1981 「X線透過試験による古墳時代刀劍の調査」『出土遺物・民俗文化財へのX線透過試験の応用』元興寺文化財研究所保存科学研究室 p15~28
- 西山要一 1982 「辛亥銘文の発見」『埼玉稱荷山古墳 辛亥銘鉄劍修理報告書』埼玉県教育委員会 p4~7
- 西山要一 1986 「古墳時代の象嵌・刀具について」『考古学雑誌』第72巻第1号 日本考古学会 p1~30
- 西山要一 1992 「金属製品の分析調査」『本鷦大塚古墳』須坂市教育委員会 p61~63
- 橋本博文 1985 「亀甲蟹鳳凰文象嵌円頭大刀・小刀及び羅本を象嵌装飾する大刀と佩用者の性格」『板倉町史』板倉町 p287~306
- 橋本博文 1986 「金銀象嵌装飾円頭大刀の編年」『月刊考古学ジャーナル』268号 ニュー・サイエンス社 p23~28
- 橋本博文 1993 「亀甲蟹鳳凰文象嵌大刀再考」『埋古論祭—久保哲三先生追悼論文集』久保哲三先生追悼論文集刊行会 p221~256
- 福島県立博物館 1988 「日本刀の起源展—直刀から脇刀へ—」
- 福田敬一・神戸聖悟 1991 「山名原口II遺跡」高崎市文化財調査報告書第111集
- 福田正龍・内藤善史 1996 「田益新田II遺跡・西山古墳群」興山県埋蔵文化財調査報告109
- 富士市教育委員会 1994 「中原第3号墳・第4号墳発掘調査報告書」
- 藤森栄一 1963 「下原訪町誌」(上) 下原訪町
- 増田逸朗 他 1977 「篆本山古墳群」埼玉県遺跡発掘調査報告書第10集
- 町田 章 1976 「墓刀の系譜」『研究論集』II 奈良国立文化財研究所 p77~110
- 町田 章 1987 「岡田山1号墳の鐵杖大刀についての検討」『出雲阿田山古墳』島根県教育委員会 p84~98
- 町田 章 1988 「三重県井田川茶臼山古墳の鐵地銀象嵌鋲じり環頭大刀について」『井田川茶臼山古墳』三重県教育委員会 p105~114
- 松田隆嗣・今津寅生 1992 「出土鉄製品の構造技法調査」福島県立博物館学術調査報告第22集
- 丸子 亘 1978 「小見川町城山第1号前方後円墳」小見川町教育委員会
- 汀 安衛 他 1981 「常陸楢山古墳」大洋村教育委員会
- 美里町 1986 「美里町史」通史編
- 皆野町 1988 「皆野町誌」通史編
- 南河内町 1992 「南河内町史」史料編 I 考古
- 向坂鋼二 他 1971 「掛川市宇洞ヶ谷横穴墓発掘調査報告書」静岡県文化財調査報告書第10集
- 向坂鋼二 他 1991 「瓦屋西古墳群」浜松市教育委員会
- 村上久和 他 1992 「上ノ原横穴墓群I」 大分県教育委員会
- 茂木雅博 1980 「常陸觀音寺山古墳群の研究」
- 本村家章 1990 「古墳時代の基礎研究稿—資料稿(II)ー」『東京国立博物館紀要』第26号 p9~282
- 森将軍塚調査会 1992 「史跡 森将軍塚古墳」更埴市教育委員会
- 森下 衛・森 正 1993 「府當農業基盤整備事業関係平成4年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報(1993)』京都府教育委員会
- 浅山 譲 1978 「西都原周辺出土の鐵製銀象嵌鏡」『宮崎考古』第4号 宮崎考古学会 p14~15
- 山村 宏 他 1965 「島田市水掛波古墳群発掘調査報告書」静岡県文化財保存協会
- 山本貴之 1980 「松延古墳群」常陸自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書!茨城県教育財團文化財調査報告V

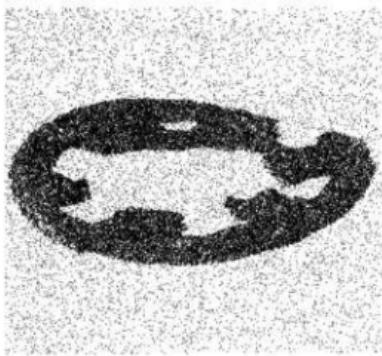
- 横田義章 1985 「古墳時代の象嵌文様—九州の諸例紹介を中心に—」『九州歴史資料館研究論集』10 p83~93
- 横田義章 1993 「古墳時代の銀象嵌二例」『九州歴史資料館研究論集』18 p55~60
- 李午臺・金邱軍 1992 「三國時代斗鐵製象嵌技法のそと科學的研究」
- 若林勝邦 1899 「銀象嵌を施せる鉄刃及び鉗に就て」『考古学会雑誌』第3編第1号 考古学会 p10~13
- 早稲田大学考古学研究室 1963 「千葉県芝山町山田古墳群調査報告」「金鉢」17



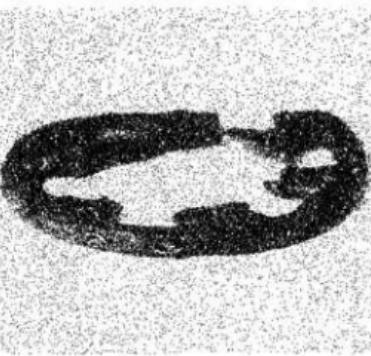
6. 大道古墳出土鞘尻（もしくは円頭柄頭）



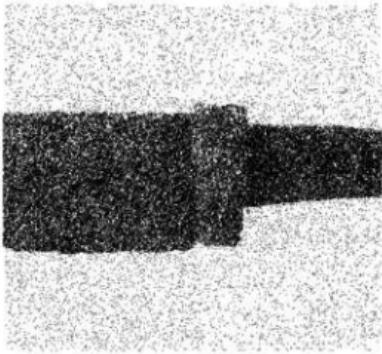
7. 同 左 X線写真



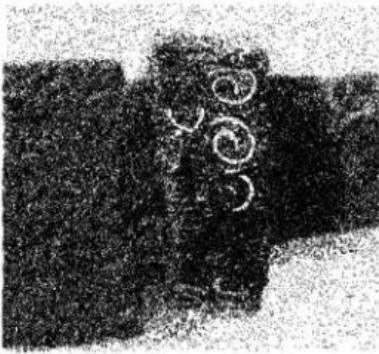
8. 金崎古墳群出土鐸（処理前）



9. 同 左（処理後）



10. 金崎古墳群出土鉢（処理前）



11. 同 左（処理後）



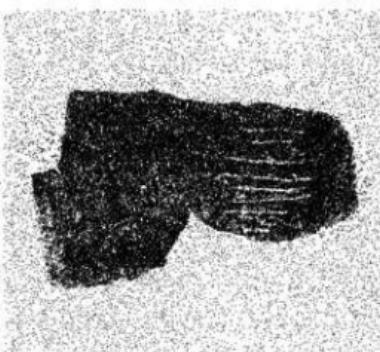
12. 広木大町 2 号墳出土鐸（処理前）



13. 同 左（処理後）



14. 広木大町 5 号墳出土鉦瓦（処理前）



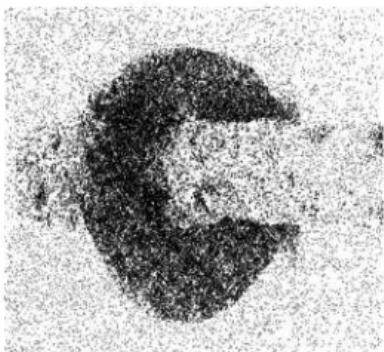
15. 同 左（処理後）



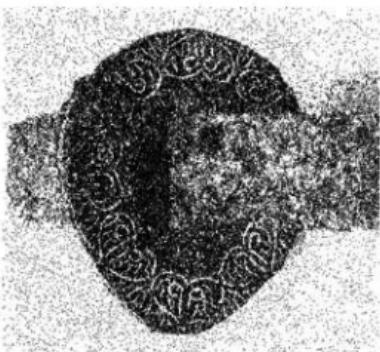
16. 広木大町 9 号墳出土鐸（処理前）



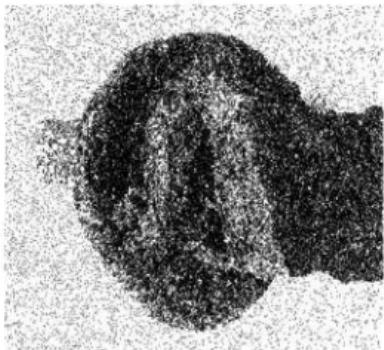
17. 同 左（処理後）



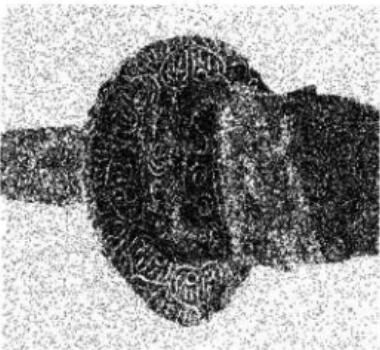
18. 広木大町 9 号墳出土鏡（処理前）



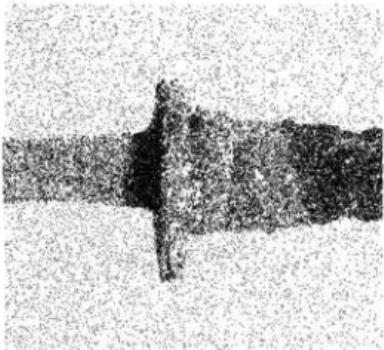
19. 同 左（処理後）



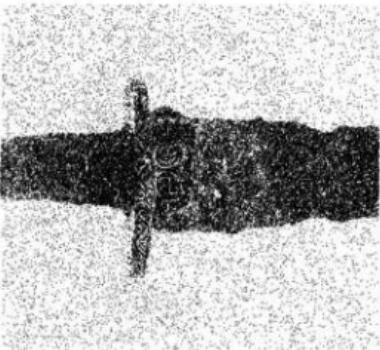
20. 広木大町 9 号墳出土鏡・鍔（処理前）



21. 同 左（処理後）



22. 広木大町 9 号墳出土鏡・鍔（処理前）



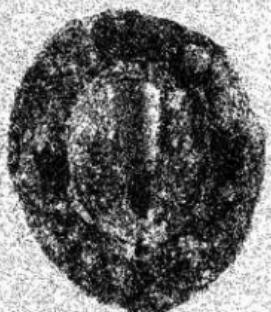
23. 同 左（処理後）



24. 広木大町20号墳出土鍔（処理前）



25. 同 左（処理後）



26. 広木大町20号墳出土鍔・縄（処理前）



27. 同 左（処理後）



28. 広木大町20号墳出土綠金具（処理前）



29. 同 左（処理後）



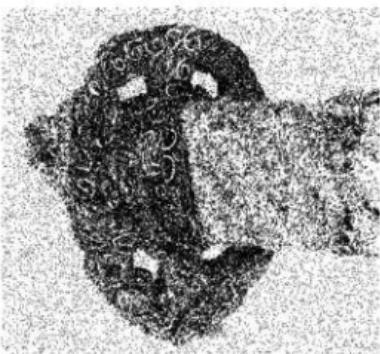
30. 広木町20号墳出土鏡金具（処理前）



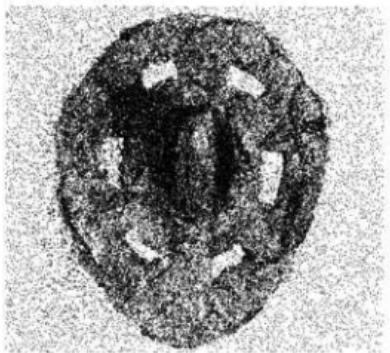
31. 同 左（処理後）



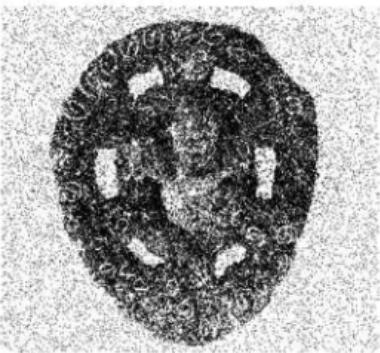
32. 三ヶ尻林 4号墳出土鏡・縁（処理前）



33. 同 左（処理後）



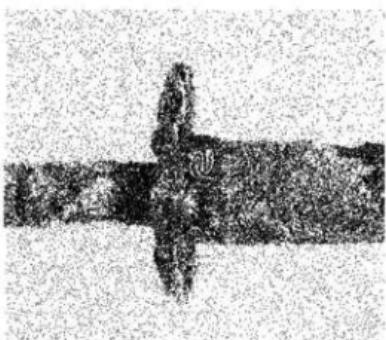
34. 三ヶ尻林 4号墳出土鏡（処理前）



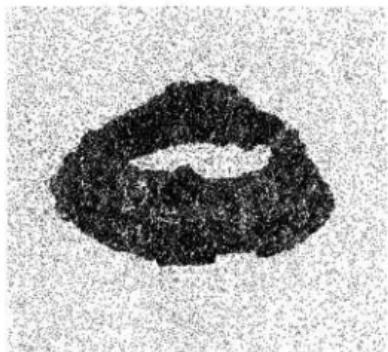
35. 同 左（処理後）



36. 三ヶ尻林 4 号墳出土鐸・鍔 (処理前)



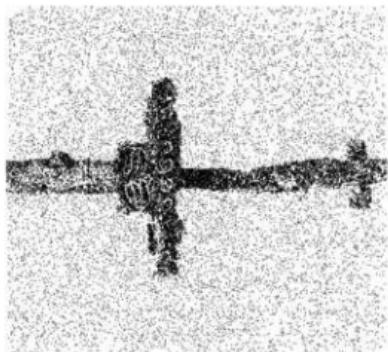
37. 同 左 (処理後)



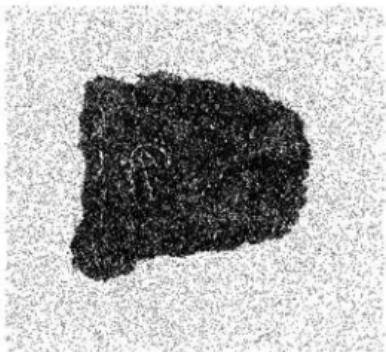
38. 三ヶ尻林 4 号墳出土柄頭緣金具



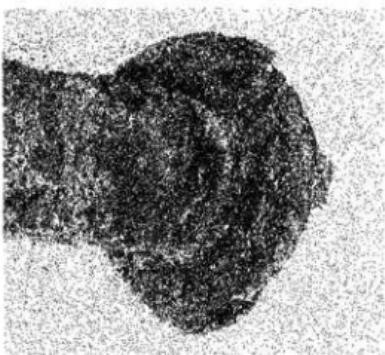
39. 三ヶ尻林 4 号墳出土柄元緣金具



40. 三ヶ尻林 4 号墳出土鐸・鍔



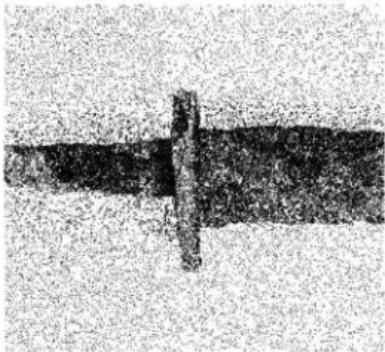
41. 三ヶ尻林 4 号墳出土鞘尻



42. 塩古墳群III支群18号墳出土鐘・鍾



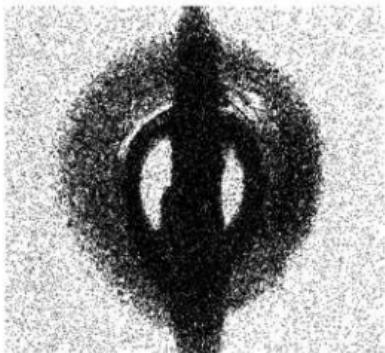
43. 同 左



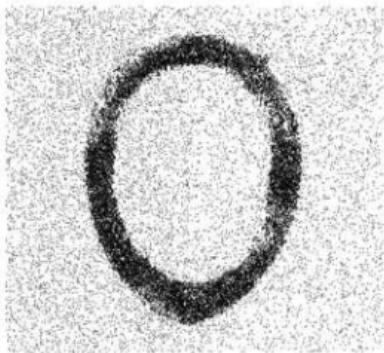
44. 塩古墳群III支群18号墳出土鐘・鍾



45. 同 左 X線写真



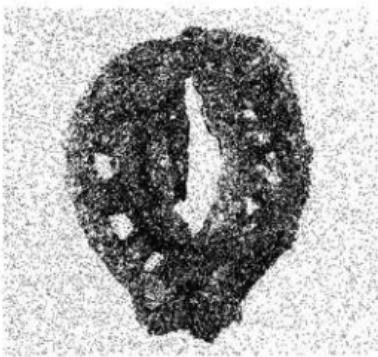
46. 塩古墳群III支群18号墳出土鐘 X線写真



47. 同 左 銀金具 X線写真



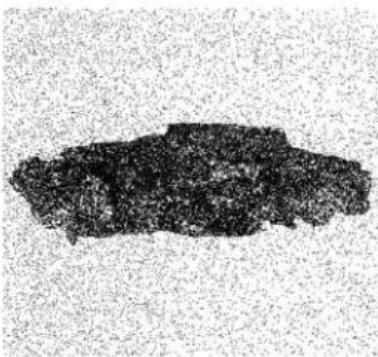
48. 永明寺古墳出土鐸（柄側）



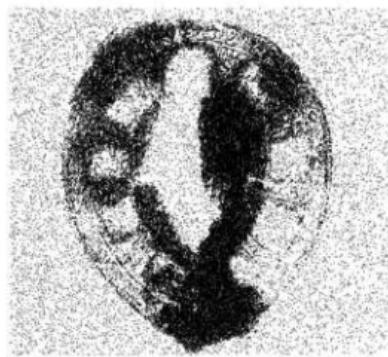
49. 同 左（刀身側）



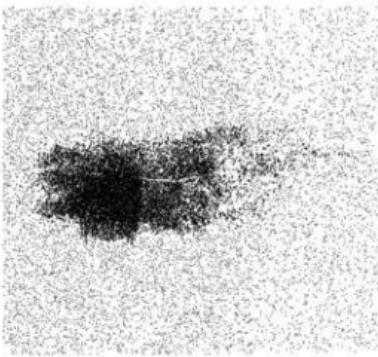
50. 永明寺古墳出土鐸（横から）



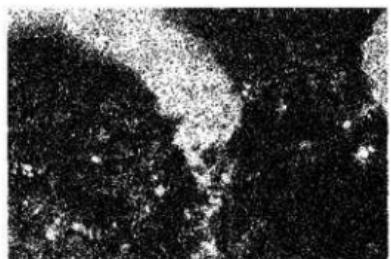
51. 永明寺古墳出土刀身・鍔



52. 永明寺古墳出土鐸 X線写真



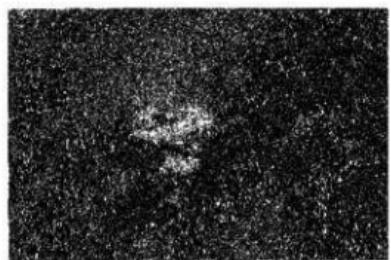
53. 同 左 鍔 X線写真



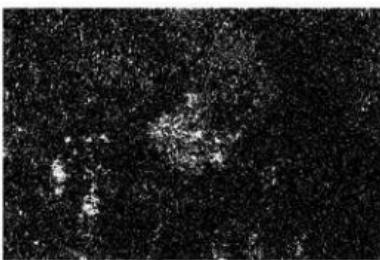
54. 資料【12】綠金具



55. 資料【7】頭



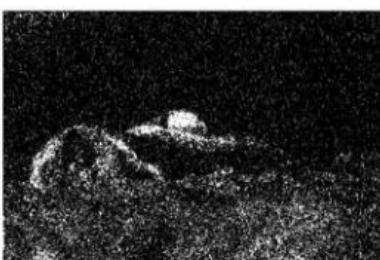
56. 資料【15】鍔



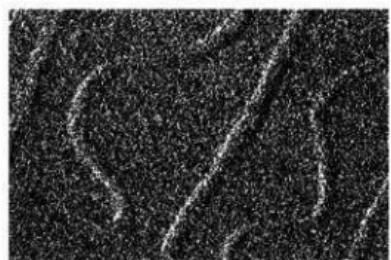
57. 資料【15】柄頭綠金具



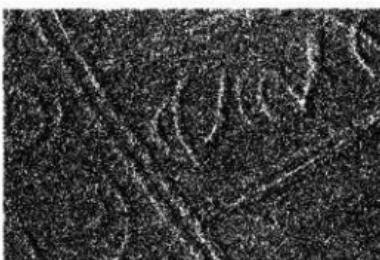
58. 資料【12】鍔



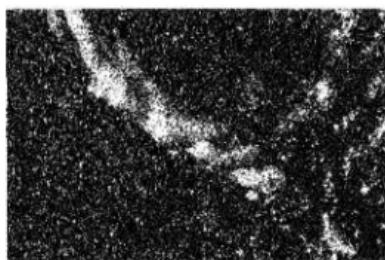
59. 資料【12】鍔



60. 資料【18】鍔 (X線處理画像)



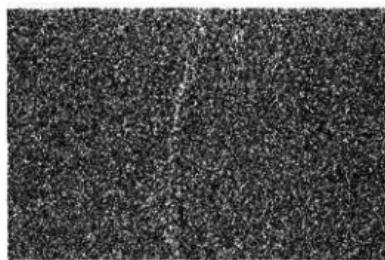
61. 資料【18】鍔 (X線處理画像)



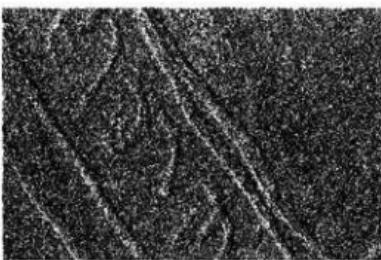
62. 資料【9】錘



63. 資料【12】錘



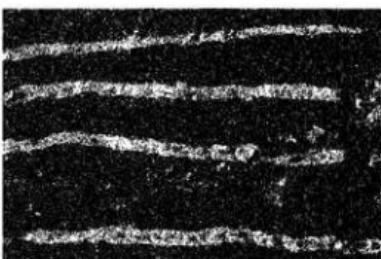
64. 資料【9】錘（X線處理画像）



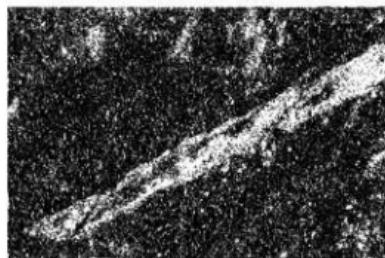
65. 資料【18】錘（X線處理画像）



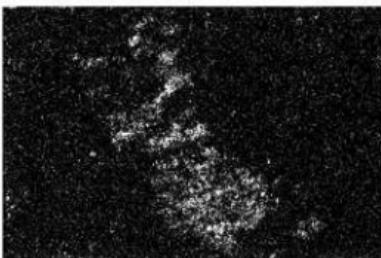
66. 資料【10】鞘尻



67. 資料【10】鞘尻



68. 資料【9】錘



69. 資料【15】柄頭緣金具

## 研究紀要 第12号

1996

平成8年3月25日印刷

平成8年3月31日発行

発行 財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-01 大里郡大里村大字箕輪字船木884

☎0493-39-3955

印刷 朝日印刷工業株式会社